

北大時報

January 2010

No.670

平成22年

1

佐伯総長 年頭の挨拶

大学入試センター試験の実施

道内4高専と連携協定を締結



大学入試センター試験(2010.1.16~17, 関連記事 5 頁に掲載)

目 次

年 頭 の 挨 拶

- 総長 佐伯 浩…………… 1

全 学 ニ ュ ー ス

- 道内4高専と連携協定を締結…………… 4
- 大学入試センター試験の実施…………… 5
- 平成22年度予算政府案(本学関係分)の主要事項…………… 6
- 上野の森で「大学サイエンスフェスタ」を開催
「北海道大学が拓く最先端科学～北海道から世界へ、世界から北海道へ～」…………… 8
- 第5回九大・北大合同活動報告会を開催…………… 9
- 北大フロンティア基金……………10
- 「北海道大学プロフェッサー・ビジット2009」が終了……………12
- 人材育成本部上級人材育成ステーションで「赤い糸会&緑の会」を開催……………14
- 「国際化加速に向けたFD～目指せ！バイリンガル大学～」を実施……………15
- 学生チームがCOP15学生会議「GREEN CAMPUS」に参加……………16

部 局 ニ ュ ー ス

- 日韓拠点大学交流事業セミナー及び部局間交流協定調印式を韓国江陵市で開催……………17
- 水産科学研究院が函館市との連携協定を締結…………… 18
- 総合博物館土曜市民セミナー「市民の学びの場としての博物館」が開催される……………18
- 触媒化学研究センターが「第24回CRC国際シンポジウム」
「第20回研究討論会」を開催……………19
- 触媒化学研究センター創立20周年記念行事を開催……………20
- 経済学研究会会計専門職大学院特別セミナーを開催……………21
- 農学研究院に(財)発酵研究所による寄附分野設置－微生物新機能開発学分野－……………22
- 低温科学研究所技術部で「第2回技術部セミナー」及び「第15回技術発表会」を開催……………23
- 第7回脳科学研究教育センター・シンポジウム「脳の個性を科学する：遺伝子と環境がつくる脳の力」……………24
- 水産学部キャンパス・北農寮間を結ぶ連絡バスの試験運行始まる！……………26
- 体験学習教室「サケは海からの贈り物」を開催……………27
- 横浜港大棧橋碇泊中の学部附属練習船おしよる丸で「水産学部進学説明会 in 横浜」を開催……………28

- 水産学部附属練習船おしよる丸に"さかなクン"現る！……………29
- 工学部で「心のケアに関する講習会」を開催……………30
- 「平成21年度第1回獣医学研究科FD講演会」を開催……………30
- 第28回遊戯会仮装「明治桃太郎害虫駆除」写真を大学文書館で受贈……………31
- 総合博物館がカイザースラウテルンで開催された標本展示に協力……………32
- 平成21年度北海道大学教育GPシンポジウム「大学博物館から拓く学生教育の未来2」開催……………34
- 総合博物館でバラタクソノミスト養成講座を開催……………35
- 第7回北海道大学教育GPセミナー「2000年後の美術館・博物館プロジェクト～現代アートとのコラボレーションによるミュージアムの活性化～」開催……………39
- 北大教育GP主催公開研究会「フィンランドの『教えない教育』」開催……………40
- 北海道大学病院で「北大ポプラチェンバロとバック音楽の調べ」を開催……………41
- 北海道大学病院でクリスマスコンサートを開催……………42
- 北大幼稚園最後のクリスマスお楽しみ会……………43

博 士 学 位 記 授 与

- 課程博士23人、論文博士12人……………44

研 修

- 平成21年度国立大学法人北海道大学事務職員英語研修……………47

表 敬 訪 問

- ……………47

諸 会 議 の 開 催 状 況

- ……………48

学 内 規 程

- ……………48

人 事

- ……………49

訃 報

- 名誉教授 木村 道也 氏……………50
- 名誉教授 小澤 保知 氏……………51

年頭の挨拶



総長 佐伯 浩

新年あけましておめでとうございます。平成22年の年頭にあたり、教職員、学部生それに大学院生の皆様方に、新年の御挨拶を申し上げます。本学が法人化され、第1期の中期目標計画期間の6年を、この3月末に終えることとなります。法人化を目前に控えた時期に立てた中期目標については、それを各年度計画に落とし込み、年度ごとに達成状況を確認して、目標達成に全力を挙げてまいりました。この間の皆様方の努力に心より感謝を申し上げますとともに、残された3ヶ月を活用してさらに達成度を高めたいと考えているところです。

国立大学の法人化は、我が国の行財政改革の一環として実施されたため、国からの運営費交付金の毎年1%削減に加えて、大学病院の毎年2%の経営改善係数の導入による負担等、大学の財政面の状況は年々厳しさを増してきました。本学においても、平成21年度の運営費交付金は、平成16年度に比べて約55億円も減少していることでも状況はお判りかと思えます。しかしながら、教職員数の削減や定型的な業務の外注化等による人件費の削減、物品の共同購入の拡大と競争入札の導入による物件費の削減、道内国立大学法人連合による資金の共同運用それに大型の競争的研

究資金の獲得や民間企業等との共同研究・受託研究等のオーバーヘッドにより、利益剰余金である目的積立金を増やすことができました。これは、全教職員の努力と智恵によるものと、心より感謝申し上げます。

この積立金は、国からの助成が期待できない、主として学生が利用する全天候型の体育館の新設、学生食堂の増設、主として留学生を対象とした学生寮の新築、診療用設備の更新、動物実験施設の新設、それに省エネ型の変電設備や照明設備の導入に充てられるもので、これらは将来、経費削減効果や次期中期目標達成に貢献できるものと考えています。本学が世界の教育研究の拠点としての存在を確かなものとするためにも財政基盤の強化が必要なことは言うまでもありません。

さて、我が国高等教育機関の世界先進諸国の中での位置付けをみると、高等教育への公財政支出は、対GDP比で0.5%でOECD各国平均の1.1%に較べ半分であり、先進諸国の中で最低であり、またその伸び率は日本が唯一マイナスです。また、基礎研究費への投資についても、米国はこれから10年間で倍増することになっており、英国はこの13年間で88%の増を示している、これからも増加傾向です。中国は、この数年、年間16~25%の増を示しており、他の諸国も減少している国はありません。これに対し、我が国は国の財政赤字のため、ほとんど変化が無いに近い状況でした。政府は科学技術創造立国を標榜しながらも、他の先進諸国等に較べて高等教育機関への資源配分は厳しいものでした。御存知のとおり、昨年夏、政権が交代しました。平成22年度予算については、新政権になって10月15日に概算要求を改めて提出しました。その後、行政刷新会議の下に置かれた事業仕分けワーキンググループで、大学関連では運営費交付金、若手研究者育成や先導的な教育研究等を推進するための各種競争的資金、地域科学技術振興予算など、大学運営の基盤となる経費が事業仕分けの対象となり、大変厳しい結果が示されました。私と致しましても、「知の拠点」である大学の教育研究の体制が

崩壊しかねないとの危機感を持ちましたし、先進諸国との差を埋めるのに如何なる方策があるか考えていました。

このような状況を受けて、11月24日に本学を含めた7国立総合大学及び早稲田大学・慶應義塾大学の9学長による「大学の研究力と学術の未来を憂う」との共同声明の会見を実施、11月26日には国立大学協会による緊急アピール、11月27日には国公立3団体による要望書の提出、そして12月2日には、道内の7国立大学長による「平成22年度予算編成に関する共同声明」が出され、国公立の大学が一体となって高等教育及び基礎研究の重要性を訴えてきましたし、同時に国立大学の果たしている役割も充分説明をしまいいりました。そして個々の事業ごとに仕分けをする前に、政府として高等教育の将来の展望を明確にするとともに、基礎研究や研究者育成を含む、科学技術全般に亘っての政策立案の基本方針を明確にすることを先行実施して欲しいことと、この基本方針の策定に際しては、高等教育機関等との対話の実施も要望してまいりました。また、事業仕分けの結果に対するパブリックコメントでは、北海道大学も含めた全国の大学の若手研究者から前述した内容を含んだ意見が多く出されたようで、これも最終判断に大きな影響を与えたかもしれません。

そして、昨年末の結果では、運営費交付金は昨年度に較べてマイナス110億円で対前年比マイナス0.9%と決まったそうです。また病院に対して第2次補正予算（設備関係）で82億円を前倒し措置済みとの事で、実質的には前年比マイナス0.24%との説明でした。また、来年度以降の運営費交付金の算定ルールは、平成23年度の概算要求までには決定される予定とのことです。またグローバルCOEプログラム等については、若手研究者等の雇用に影響を与えないように、間接経費分を削減するとのことですが、科学研究費補助金については、前年度比1.5%増となり、初めて2,000億円が確保されたようです。全教員が積極的に科学研究費補助金へ応募していただきたいですし、来年3月末をもって定年を迎

えられる先生方も年金を受け取ることができ64歳までは再雇用されますので是非応募していただきたいと思います。とにかく、国立大学法人の重要性を認識してもらふことと、その存立の基盤である運営費交付金については、十分な額の措置を期待したいですし、先進諸国の大学と対等な競争環境を造っていただきたいと思います。

さて、本年4月からは第2期中期目標期間に入ることになります。第1期においては国立大学法人としての組織・運営体制を整備し、教育改革や研究戦略、国際連携、施設・環境整備について中期目標をほぼ達成しつつあります。しかし、大学の基本的使命である教育や人材育成については、その公共性と社会的責任を充分認識して、教育成果の国際的適用性を確保するための取り組みの強化が必要です。また同時に、研究戦略や国際連携、施設・環境整備あるいは大学運営に関しても、世界の中の北海道大学という観点から、私どもの活動の推進が望まれます。また、本学は、大学の持つべき多くの機能のうち、歴史的背景、大学の規模、教育研究理念そして我が国の基幹総合大学としての位置付けから、特に①世界的研究・教育拠点 ②高度専門職業人養成、それに ③地域貢献や産学官連携それに国際交流等の社会貢献、を果たす機能を有する大学として国の内外から高く評価される大学を目指さねばなりません。以上のことから、第2期中期目標・中期計画においては、本学の教育研究理念と本学が果たすべき機能に基づき、本学の全ての活動を包括する基本目標として、1) 世界水準の人材育成システムの確立、2) 世界に開かれた大学の実現、3) 世界水準の知の創造と活用、そして 4) 大学経営の基盤強化、の4つを設定しました。

特に、「世界水準の人材育成システムの確立」については重要で、現在、世界の高等教育界で起こっている高等教育の各種基準の統一化、それに伴う教員・学生の国境を越えたモビリティの向上といった状況を見据えるべきです。今、我々がこの取り組みを躊躇するならば、アジア圏域の優秀な留学生を集める

ことができなくなるだけでなく、近い将来、我が国の優秀な学生をも集めることが不可能になる恐れがあります。自国の高校生や大学生が外国の大学へ入学するといった状況は、EU諸国ではすでに起こり始めています。この新しい人材養成システムが確立され、さらに奨学金や宿泊施設の充実、加えて教員の国際公募が始まると、本学は「世界へ開かれた大学」の実現の可能性も高まることとなります。私どもは、他の大学に先駆けて世界水準の人材養成システムの構築に全力投入する必要があります。また、世界に開かれた大学の実現に当っては、海外の優秀な留学生を学部段階から受け入れる必要がありますし、同時に本学の日本人学生についても積極的に海外の大学で学べるよう支援を行いたいと思っています。さらに、留学生を受け入れた先生方の負担が大きくなるよう、事務組織の改革を行うことが必要であります。「世界水準の知の創造と活用」については、研究主導型の基幹総合大学として、世界水準の研究を推進するため、本学の研究を特徴づける重点領域分野を選定し、大学として積極的に支援したいと思っていますし、新しく改編した創成研究機構を中心に、全学的な新領域・融合領域分野における学際的研究を開拓するとともに、産学連携本部を核として、産学官連携の促進と知の活用を図っていきたいと考えています。

また、「大学経営の基盤強化」については、トップマネジメントを強化し、内外の諸課題に迅速に対処しうる体制を構築するとともに、我々が目指す世界水準の人材育成システムの確立と開かれた大学の実現にふさわしい事務組織への改組と職員の能力開発に努めます。さらに、総合的な危機管理体制やエコキャンパス化を目指した、施設マネジメント体制の確立や広報・情報戦略についても一層の強化に努めます。

以上、本年4月からの次期中期目標・計画策定の基本的考え方を示しましたが、この目標・計画の実現のためには、北海道大学の全ての教職員・学生が本学のさらなる発展のため、心を一つにして事に当る必要があります。年頭に当たり、あらためて、今年が皆様にとって良き年になることを御祈念申し上げますとともに、本学が世界の北海道大学になる記念すべき年になることを願って、私の年頭の挨拶とさせていただきます。

〈新年交礼会の様子〉

1月4日(月)、佐伯総長の年頭の挨拶とともに、新年交礼会が始まりました。会場となった百年記念会館大会議室には、役員、部局長等が大勢集まりました。



年頭の挨拶を述べる佐伯総長



逸見理事・副学長から乾杯の発声

全学ニュース

道内4高専と連携協定を締結

本学は、道内4高専（函館工業高等専門学校、苫小牧工業高等専門学校、釧路工業高等専門学校及び旭川工業高等専門学校）と、学术交流において広く相互協力することにより、研究及び教育の推進に寄与することを目的として、連携協定を12月15日（火）に締結しました。

本学で行われた締結式では、釧路工業高等専門学校の岸浪建史校長（本学元理事・副学長）より協定の概要についての説明が行われた後、関係者が見守る中、佐伯浩総長と岸浪校長、岩熊敏夫函館工業高等専門学校長、秋山俊彦苫小牧工業高等専門学校長及び高橋英明旭川工業高

等専門学校長による協定書の署名がなされました。その後、佐伯総長と岸浪校長の挨拶が行われ、締結式は滞りなく終了しました。

本協定締結により、本学は道内4高専と、（1）情報交換、（2）研究協力、（3）教育協力、（4）研究設備の相互利用、（5）人材交流、（6）シンポジウム等の開催、（7）その他研究・教育及び地域貢献に寄与する活動について連携して推進することとし、両者による連絡協議会を持ち、相互の教育・研究の交流を促進し、北海道における産業の高度化、地域人材の育成への貢献を目指すこととしています。



協定書署名を終えて手を重ね合わせる
左から、高橋旭川高専校長、岩熊函館高専校長、佐伯総長、
岸浪釧路高専校長、秋山苫小牧高専校長



締結式で挨拶を述べる佐伯総長

（学務部教務課、学術国際部産学連携・研究推進課）

大学入試センター試験の実施

平成22年度の大学入試センター試験が、1月16日(土)、17日(日)の両日、全国一斉に実施されました。

本学においては、大学入試センター試験を実施するにあたり、実施本部、総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を設置し、本学教職員等約1,200人の協力を得て、無事終了しました。

なお、第2日目の1月17日は札幌近郊の雪害の影響により、札幌地区試験場の試験開始時刻を1時間繰り下げて実施しました。

全国の志願者は、前年度より9,386人増加し553,367人でした。道内の志願者は、前年度より357人増加して19,836人となりました。

本学が担当する試験場の志願者数は、藤女子大学試験場を含めて5,921人で、各試験場(会場)の受験状況は次のとおりです。

また、新型インフルエンザ対応として、大学入試センター試験追試験を1月30日(土)、31

日(日)の両日、都道府県ごとに実施します。道内での受験対象者数は、17日の試験を雪害の影響により受験できなかった者を含めて130人で、本学高等教育機能開発総合センターを試験場として、北海道教育大学と共同で実施します。



受験風景

各試験場(会場)の受験状況

日 程 教 科	1月16日(土)											1月17日(日)												
	公民		地理歴史		国語		外国語【筆記】		英語【リスニング】		英語【リスニング】 (再開テスト)	理科①		数学①		数学②		理科②		理科③				
	受験した者の数	受験しなかった者の数	受験した者の数	受験しなかった者の数	受験した者の数	受験しなかった者の数	受験した者の数	受験しなかった者の数	受験した者の数	受験しなかった者の数	受験者数	辞退者数	受験した者の数	受験しなかった者の数										
試験場(会場)名・志願者数																								
北海道大学試験場	農学部会場	710	388	322	432	278	643	67	657	53	649	61			292	418	541	169	493	217	337	373	264	446
	人文・社会科学総合教育研究棟会場	919	663	256	451	468	867	52	875	44	866	53			378	541	805	114	737	182	495	424	416	503
	理学部会場	498	357	141	275	223	463	35	467	31	463	35			226	272	397	101	385	113	274	224	214	284
	工学部会場	657	504	153	297	360	612	45	620	37	617	40			295	362	549	108	523	134	390	267	312	345
	高等教育機能開発総合センターA会場	760	451	309	291	469	646	114	648	112	600	160			285	475	424	336	328	432	197	563	127	633
高等教育機能開発総合センターB会場	935	700	235	420	515	857	78	868	67	860	75			295	640	745	190	677	258	463	472	399	536	
高等教育機能開発総合センターS会場	593	396	197	286	307	527	66	539	54	532	61			262	331	475	118	455	138	370	223	317	276	
藤女子大学試験場	464	261	203	198	266	391	73	399	65	386	78			205	259	299	165	250	214	181	283	94	370	
札幌地区 小計		5,536	3,720	1,816	2,650	2,886	5,006	530	5,073	463	4,973	563			2,238	3,298	4,235	1,301	3,848	1,688	2,707	2,829	2,143	3,393
			67.2%	32.8%	47.9%	52.1%	90.4%	9.6%	91.6%	8.4%	89.8%	10.2%			40.4%	59.6%	76.5%	23.5%	69.5%	30.5%	48.9%	51.1%	38.7%	61.3%
北海道大学水産学部試験場		385	244	141	197	188	338	47	349	36	347	38			157	228	317	68	296	89	209	176	157	228
			63.4%	36.6%	51.2%	48.8%	87.8%	12.2%	90.6%	9.4%	90.1%	9.9%			40.8%	59.2%	82.3%	17.7%	76.9%	23.1%	54.3%	45.7%	40.8%	59.2%
合 計		5,921	3,964	1,957	2,847	3,074	5,344	577	5,422	499	5,320	601	4	0	2,385	3,526	4,552	1,369	4,144	1,777	2,916	3,005	2,300	3,621
			66.9%	33.1%	48.1%	51.9%	90.3%	9.7%	91.6%	8.4%	89.8%	10.2%			40.4%	59.6%	76.9%	23.1%	70.0%	30.0%	49.2%	50.8%	38.8%	61.2%

(学務部入試課)

平成22年度予算政府案(本学関係分)の主要事項

平成22年度予算政府案(本学関係分)の主要事項は、次のとおりです。

事 項	摘 要
【組織整備関連】	
1. 学部	
○入学定員の改訂	
◇医学部 医学科	入学定員 7名
2. 大学院	
○学院・研究院の新設	
◇総合化学院(1専攻)	入学定員 修士課程 129名 博士課程 38名
〔(振替元)理学院(1専攻)〕	〔入学定員 修士課程 △56名 博士課程△22名〕
〔工学研究科(3専攻)〕	〔入学定員 修士課程 △62名 博士課程△16名〕
◇工学院(12専攻)	入学定員 修士課程 326名 博士課程 69名
〔(振替元)工学研究科(12専攻)〕	〔入学定員 修士課程△278名 博士課程△69名〕
○専攻の設置	
◇保健科学院(1専攻)	入学定員 博士課程 8名
○専攻の廃止	
◇理学院(1専攻)	入学定員 修士課程 △20名 博士課程△8名
○入学定員の改訂	
◇法学研究科(1専攻)	入学定員 専門職学位課程△20名
◇理学院(1専攻)	入学定員 修士課程 2名 博士課程 1名
◇環境科学院(1専攻)	入学定員 修士課程 △2名 博士課程△1名
◇生命科学院(1専攻)	入学定員 修士課程 △3名 博士課程 8名
◇文学研究科(3専攻)	入学定員 博士課程△9名
【特別経費】	
プロジェクト	18件(6)
全国共同利用・共同実施	5件(5)
基盤的設備等整備	1件(1) 計29件 内訳は次頁のとおり
大学改革共通課題	4件(4) ()書きは新規分(17件)で内数
附属病院機能強化	1件(1)
【施設関連】	
[施設整備費補助金]	
○環境資源バイオサイエンス研究棟改修 施設整備等事業(PFI事業14-6)	(27,200㎡)
	< 4,690>
○附属図書館再生事業[国債2-2](図書館本館)	2,810㎡
○附属図書館改修(図書館本館)	(4,740㎡) ※ ()は改修面積を表す。
[財務・経営センター施設費交付事業費]	
○営繕事業	6事業(予定)

平成22年度特別経費内訳

【プロジェクト】

事 項	部 局 等 名	事業期間
＜国際的に卓越した教育研究拠点機能の充実＞		
統合物質創製化学推進事業－先導的合成の新学術基盤構築と次世代中核研究者の育成－	触媒化学研究センター	H22～H27
＜高度な専門職業人の養成や専門教育機能の充実＞		
国際基準に合った動物実験倫理教育プログラムの開発	獣医学研究科	H20～H22
「持続可能な低炭素社会づくり」に向けた教育プログラムの策定及び国際枠組みの構築に関する研究・提言	国際戦略本部	H20～H22
高度天文観測ネットワークの構築による先進的な宇宙物理学教育研究の展開	理学研究院	H21～H25
国立獣医系大学による標準的な基盤教育プログラムの開発	獣医学研究科	H21～H23
総合若手人材育成事業－若手博士研究者の社会活躍のためのキャリア意識改革と国際化の推進－	人材育成本部, 工学研究科(工学系教育研究センター)	H22～H27
＜大学の特性を生かした多様な学術研究機能の充実＞		
アイヌ・先住民に関する総合的・学際的研究	アイヌ・先住民研究センター	H20～H23
環オホーツク環境研究ネットワークの構築－環オホーツク圏における生産環境の将来予測－	低温科学研究所, スラブ研究センター	H19～H23
軽度発達障害児・者に対する生涯教育支援プログラムの開発	教育学研究院	H19～H22
次世代ポストゲノム研究・開発プロジェクト	先端生命科学研究院	H20～H24
先端的光イメージング研究拠点形成プロジェクト	医学研究科	H20～H24
次世代ツーリズムの創造に関する総合的・学際的研究	観光学高等研究センター	H21～H24
血管を標的とする革新的医薬分子送達法の基盤技術の確立	歯学研究科, 薬学研究院	H21～H25
国民病としてのピロリ菌等の持続性感染による感染癌撲滅を目指した戦略的研究推進事業	遺伝子病制御研究所	H21～H25
ストレスによる心の病の革新的治療を目指した領域融合研究推進事業	薬学研究院, 医学研究科, 教育学研究院	H22～H26
附置研究所間アライアンスによるナノとマクロをつなぐ物質・デバイス・システム創製戦略プロジェクト	電子科学研究所	H22～H27
＜産学連携機能の充実＞		
地域医療を支える循環型医師出向制度の構築	大学病院	H22～H24
北海道企業群によるナノ加工技術集積拠点の形成－ナノインプリントによる生産技術の開発－	創成研究機構	H22～H27
計	18件	

【全国共同利用・共同実施】

事 項	部 局 等 名	事業期間
人獣共通感染症リサーチセンターにおける共同研究の推進	人獣共通感染症リサーチセンター	H22～H27
低温科学研究の推進－革新的低温科学の創出と展開－	低温科学研究所	H22～H27
触媒化学研究拠点における公募型共同研究・情報発信事業 －持続可能社会のための触媒化学研究基盤の構築－	触媒化学研究所	H22～H27
スラブ・ユーラシア地域研究にかかわる拠点	スラブ研究センター	H22～H27
感染癌の先端的共同利用・共同研究の推進	遺伝子病制御研究所	H22～H27
計	5件	

※【プロジェクト】及び【全国共同利用・共同実施】の事業期間は、あくまで本学概算要求上の年限であり、文部科学省の承認を得たものではありません。

【基盤的設備等整備】

事 項	部 局 等 名	事業期間
自動化書庫	附属図書館	H22
計	1件	

【大学改革共通課題】

事 項	部 局 等 名	事業期間
障害学生学習支援等経費	全学	H22
留学生受入促進等経費	全学	H22
厚生補導特別経費	全学	H22
社会人教育支援経費	全学	H22
計	4件	

【附属病院機能強化】

事 項	部 局 等 名	事業期間
地域医療拠点体制等充実支援経費	大学病院	H22
計	1件	

(財務部主計課)

上野の森で「大学サイエンスフェスタ」を開催 「北海道大学が拓く最先端科学～北海道から世界へ、世界から北海道へ～」

12月11日（金）～20日（日）の間、東京の上野公園にある国立科学博物館で北海道大学と国立科学博物館の主催で大学サイエンスフェスタを開催しました。この催しは、大学の最先端の研究をわかりやすく企画展示するもので、本学の今と4つの最先端研究のようすを、5つのゾーンを設け、それぞれのテーマを「北海道大学の今」、「地球環境の未来をつくる」、「人間の社会を作り出す心のメカニズムの解明～文化と協力を社会生態学的観点から探る～」、「触媒からはじまるイノベーション」、「人獣共通感染症の克服を目指して」として、パネル展示、体験実験、ゲーム、クイズなどを活用して来館者に北海道大学の最先端の研究を紹介しました。

会場には多くの小学生・中学生、親子連れなどが訪れスタッフによる展示物の説明に熱心に聴き入っていました。また、同窓生も多く訪れ

本学を懐かしんだり、今の北大の研究・教育について認識を新たにしていました。13日（日）には、本学の教員による講演会を開催しました。午前中に文学研究科の亀田達也教授の「心の社会性」、環境科学院の山中康裕准教授の「クールな科学者のホットな履歴書」、午後からは人獣共通感染症リサーチセンター長の喜田宏教授の「鳥、ブタ、そしてパンデミックインフルエンザ」、触媒化学研究センター服部英研究推進支援教授の「触媒が拓く未来」として各講師が各テーマで実施しました。どの講演も一般市民にわかりやすく本学の最先端研究を講演するもので、とても好評でした。

開催期間中、展示ゾーンには約14,000人、講演会には約200人のみなさんに来場いただき、北海道大学の研究・教育を知っていただく良い機会になりました。



展示ゾーン（第1会場）



展示ゾーン（第2会場）



講演会会場

（総務部総務課）

第5回九大・北大合同活動報告会を開催

12月10日(木)に東京都千代田区の都市センターホテルにおいて、「北と南から 次代を担う若手の研究発表」をテーマに、第5回「北海道大学・九州大学合同活動報告会」を開催し、両校の卒業生や産業界、文部科学省等の官公庁等から約200名の参加者がありました。

報告会は、本学佐伯総長及び有川節夫九州大学総長による「挨拶及び大学紹介」で始まり、続いて磯田文雄文部科学省研究振興局長よりご挨拶をいただきました。

引き続き、本学の岡田研究担当理事及び九州大学の村上敬宜理事より「活動報告」として1年間のトピックス等が報告されました。

前半の最後は、本学人獣共通感染症リサーチセンター長の喜田宏教授より、「鳥、ブタ、そしてパンデミックインフルエンザ」と題した特別講演が行われました。

休憩を挟み、両大学の若手研究者6名が登壇し、それぞれの研究紹介が行われました。新進気鋭の若手研究者の熱気あふれる発表に、会場の参加者も知的興奮を誘われておりました。

会場では、パネル展示も行い、本学からは、「北大基礎融合科学領域リーダー育成システム」に係るパネルを展示しました。

報告会終了後、交流会を開催し、両大学の盛んな交流を図りました。



挨拶をする佐伯総長



挨拶をする磯田文部科学省研究振興局長



特別講演を行う喜田教授



本学若手研究者による講演(佐竹暁子特任助教)

(学術国際部研究協力課)

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、法人化後の厳しい財政状況の下、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自律性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っていくこととしています。

期限を付さない、息の長い募金活動をするとしています。平成18年から平成23年までの5年間で15億円から25億円の募金額を目指しています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

【北大フロンティア基金情報】

基金累計額 (12月31日現在)

8,960件 1,366,033,251円

教職員の寄附率 23.2% (898件/3,874人)

<12月のご寄附状況>

法人等1社、個人1,152名の方々から9,514,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲載、感謝状の贈呈について掲載させていただきます。(五十音別・敬称略)

寄附者ご芳名

(法人等)

株式会社ソニックテクノ

(個人)

浅田志保子, 浅見 公子, 阿部 四郎, 荒井 覚, 筏井 洋之, 池田 慎, 石井 孝久,
 石川 恒夫, 石原 舜三, 伊勢谷久子, 磯部 熙郎, 今村 喜一, 井山 嗣夫, 梅田 浩彬,
 大畑 昇, 岡 泰子, 小内 透, 小原 之典, 折原三津夫, 笠巻 明子, 桂 信雄,
 角 幸博, 加藤 正浩, 兼宗 信吾, 亀渕 敬子, 河合 春江, 川崎 洋, 木村文早子,
 楠 祥光, 藏野由美子, 栗原 正仁, 小嶋 國利, 後藤 雅春, 小林 純也, 小林 敬,
 小室 勲, 小山 義和, 近藤 浩正, 佐長 功, 齋藤恵美子, 斉藤 ハヤ, 佐々木和子,
 佐々木雅寿, 佐藤 和洋, 佐藤 恒久, 佐藤 教男, 佐藤 美絵, 佐藤 勇治, 三分一博基,
 渋谷 正人, 下井 隆史, 白取 裕司, 杉浦 秀一, 直田 恒夫, 鈴木 一人, 鈴木仙吉郎,
 鈴木 裕章, 鈴木 宏彦, 関 孝敏, 関崎 勉, 瀬名波栄潤, 芹澤 悟, 相馬 秋夫,
 高橋 憲和, 高橋 光彦, 高見 勝利, 田口 正樹, 館田 晶子, 蓼沼 豊, 谷口 秀治,
 近岡 貞志, 政 富子, 土家 琢磨, 都筑ムツミ, 寺澤 睦, 所 伸一, 豊田 威信,
 中尾ミツ子, 長澤 貢一, 中島 恵子, 成瀬 隆, 南波慎太郎, 西谷内力世, 沼田 隆,
 野坂 政司, 野田 仁央, 野戸 敬子, 野村 修一, 橋本貴美子, 早坂 孝一, 原 真二郎,
 平尾 健一, 深見 岳央, 藤原 貢, 本間 修, 前川 健二, 前田 英樹, 眞壁 仁,
 増川ふじよ, 町村 泰貴, 松沢 弘陽, 松平 英明, 真鍋 俊枝, 三浦 敏明, 道中 和俊,

村上 明, 村守 清, 森 猛, 八幡 敬一, 八幡 憲和, 山角 浩司, 山岸 暁雄,
山崎 賢司, 山田 家正, 山根 由樹, 山本 穂, 湯浅美恵子, 横関 喜美, 吉崎 正人,
吉田 広志, 脇川 康夫

銘板の掲示 (20万円以上のご寄附)
(個人)

阿部 四郎, 佐藤 教男, 佐藤 勇治, 都筑ムツミ, 沼田 隆, 平尾 健一, 深見 岳央,
本間 修, 山田 家正

ご寄附のお申し込み方法

① 給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。

北大ホームページ

教職員向け

学内限定情報・システム

北大フロンティア基金のご案内(申込書)

<http://www.hokudai.ac.jp/fjmuk/gakunai/fund.pdf>

② 郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡しします。

③ 現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ ———— 基金事務室(事務局1階・学内電話2012/2017)

(基金事務室)

「北海道大学プロフェッサー・ビジット2009」が終了

「世界最先端の講義が、あなたの学校で受けられます」というキャッチフレーズで全国の高校に呼びかけ、高校生の環境問題への関心を高めるとともに本学の広報推進のために実施した「北海道大学プロフェッサー・ビジット2009」がこのたび無事終了しました。

この事業は、本学と朝日新聞社が環境をテーマとして提携・協力をしている「ポプラプロジェクト」により、昨年度に引き続き文部科学省と環境省の後援を得て実施したものです。

本学の教員が講師となり全国の高校で最新の研究成果に基づき講義を行うもので、今回で3回目の実施となりました。昨年度は全国26校で約4,700名の参加者に講義を行い大変好評でした。今年度も参加募集の広告を朝日新聞全国版に掲載したところ70校の応募があり、そのなかから26校で環境問題をテーマとした講義を行いました。

昨年9月に奈良県立奈良高等学校から始まったこの企画は、東京都、大阪府、神奈川県、新潟県、愛知県、広島県、鳥根県、福岡県、沖縄県など全国17都道府県26校で本学12人の教員が講義を行い、その様子は、朝日新聞の各地方紙に記事で紹介されました。

講義時間は1時間以上と高校生にとっては

少々長いものでしたが、どの講義でも参加者は熱心に聞き入っていました。高校生の環境に対する問題意識を高めるとともに本学への進学について考える場を提供することができ、とても有意義なものとなりました。

なお、昨年度と同じく数校でアドミッションセンター教員による大学説明・入試説明の実施、オープンコースウェアの取材などもあわせて行われ、さらに充実した内容となりました。

オープンコースウェア掲載ホームページ

<http://ocw.hokudai.ac.jp/Topics/ProfessorVisit/2009/>

ポプラプロジェクトとは：北海道大学と朝日新聞社は、平成17年7月に「環境」をテーマとした提携・協力について締結し、関連の事業を「ポプラプロジェクト」として共同で実施しています。

平成18年には東京・札幌で「北海道大学サステナビリティ・サイエンス・フォーラム」を開催し多くの皆さんに本学の最新の研究成果を紹介しました。平成19年度から「北海道大学プロフェッサー・ビジット」を実施し全国の高校で出前授業を行い大変好評を得ています。



岡崎西高等学校での講義
(講師：水産科学研究院 綿貫豊准教授)



基町高等学校での講義
(講師：法学研究科 児矢野マリ教授)

北海道大学プロフェッサー・ビジット2009 実施校一覧

	実施校名	実施日	講師・テーマ	対象	人数(人)
*	1 奈良県立奈良高等学校	9月17日(木)	露崎 史朗 地球環境科学研究所 准教授 「攪乱と空き地と生態遷移」	高校1年生の希望者	55
	2 サレジオ学院中学校高等学校	10月5日(月)	香内 晃 低温科学研究所長 「宇宙の水は地球の源」	中学3年生, 高校2年生全員	350
	3 新潟県立国際情報高等学校	10月7日(水)	渡部 重十 理学研究院 教授 「オーロラからのメッセージ」	高校1~3年生の全員	440
	4 福岡雙葉高等学校	10月9日(金)	有賀 早苗 農学研究院 教授 「癌やストレスに負けないしくみ」	高校1, 2年生	150
	5 神奈川県立西湘高等学校	10月13日(火)	吉田 文和 公共政策学連携研究部 教授 「ごみと循環型社会」	高校1年生の全員	320
	6 東京都立豊多摩高等学校	10月14日(水)	喜田 宏 人獣共通感染症リサーチセンター長 「鳥, プタ, そしてパンデミックインフルエンザ」	高校2年生の全員	248
	7 自修館中等教育学校	10月14日(水)	池田 透 文学研究科 教授 「外来生物と生物多様性保全」	4年生 (高校1年生相当) 全員	128
	8 広島市立基町高等学校	10月16日(金)	児矢野マリ 法学研究科 教授 「捕鯨問題と国際法」	高校1~3年生 (全校からの希望者)	82
*	9 愛知県立岡崎西高等学校	10月16日(金)	綿貫 豊 水産科学研究所 准教授 「海洋環境とペンギン」	高校2, 3年生	155
	10 明星高等学校	10月20日(火)	森川 正章 地球環境科学研究所 教授 「地球生物圏を35億年ささえる微生物と生命進化」	高校2年生(理系) 希望者	57
	11 沖縄県立那覇国際高等学校	10月21日(水)	渡部 重十 理学研究院 教授 「オーロラからのメッセージ」	高校1~3年生 (全校からの希望者)	37
	12 北海道札幌稲雲高等学校	10月29日(木)	吉田 文和 公共政策学連携研究部 教授 「ごみと循環型社会」	高校2年生	273
	13 福岡県立安積黎明高等学校	11月4日(水)	近藤 誠司 北方生物圏フィールド科学センター 教授 「地球環境と草食家畜生産システム」	高校1年生	42
	14 大阪府立生野高等学校	11月5日(木)	森川 正章 地球環境科学研究所 教授 「地球生物圏を35億年ささえる微生物と生命進化」	高校2年生の全員	319
	15 愛知淑徳高等学校	11月6日(金)	児矢野マリ 法学研究科 教授 「捕鯨問題と国際法」	高校1年生	280
	16 札幌大谷高等学校	11月7日(土)	綿貫 豊 水産科学研究所 准教授 「海洋環境とペンギン」	高校1, 2年生(理系コース)	100
*	17 北海道滝川高等学校	11月9日(月)	喜田 宏 人獣共通感染症リサーチセンター長 「鳥, プタ, そしてパンデミックインフルエンザ」	高校1, 2年生(理数科生徒)	72
*	18 島根県立益田高等学校	11月10日(火)	有賀 早苗 農学研究院 教授 「癌やストレスに負けないしくみ」	高校2年生(理数科)	120
*	19 青森県立弘前高等学校	11月10日(火)	近藤 誠司 北方生物圏フィールド科学センター 教授 「地球環境と草食家畜生産システム」	高校1~3年生の希望者	28
	20 静岡県立伊豆中央高等学校	11月17日(火)	露崎 史朗 地球環境科学研究所 准教授 「攪乱と空き地と生態遷移」	高校1, 2年生の希望者	30
	21 北海道函館中部高等学校	11月18日(水)	森川 正章 地球環境科学研究所 教授 「地球生物圏を35億年ささえる微生物と生命進化」	高校1, 2年生	480
	22 香川誠陵高等学校	11月20日(金)	有賀 早苗 農学研究院 教授 「がんやストレスに負けないしくみ」	高校1年生	104
	23 福岡県立三池高等学校	12月4日(金)	香内 晃 低温科学研究所長 「宇宙の水は地球の源」	高校2年生	236
*	24 宮崎県立延岡高等学校	12月5日(土)	岡部 聡 工学研究科 教授 「美しいかけがえのない水環境をいつまでも」	高校1年生	228
*	25 広島県立尾道北高等学校	12月9日(水)	岡部 聡 工学研究科 教授 「美しいかけがえのない水環境をいつまでも」	高校1年生	240
	26 群馬県立高崎高等学校	12月17日(木)	池田 透 文学研究科 教授 「外来生物と生物多様性保全」	高校1年生 (スーパーサイエンスハイスクール・クラス)	80
*: 過去実施校				総参加者数	4,654

(総務部広報課)

人材育成本部上級人材育成ステーションで 「赤い糸会 & 緑の会」を開催

人材育成本部S-cubicとHoP-Stationは、12月15日（火）本学学術交流会館で「赤い糸会 & 緑の会」を開催しました。

このイベントは若手研究者（DC, PD）と企業の研究開発関係者や人事担当者などが直接交流を行い、本当の博士研究者の姿やその「博士力」の高さ、また、企業研究や活動における博士研究者の活躍ぶりを理解しあう場を提供するものです。「赤い糸会」は通算10回目となります。「緑の会」は本年度よりスタートした博士研究者の実践力を高めるための企業における長期インターンシップ等を進める科学技術振興調整費によるプログラムで2回目となります。

今年度から人材育成本部が主催していることから、理系のほとんどの部局（理学院、生命科学院、農学院、工学研究科、情報科学研究科、医学研究科等）から31名（DC：25名、PD：6

名）の若手研究者が参加しました。また、企業も、リーマンショック後にもかかわらず北大の博士や博士研究者との交流を期待して電機、機械、化学、鉄鋼、医薬等の各種業界から15社（27名）が参加しました。

岡田理事・副学長による挨拶、川端理学研究院教授による会の趣旨説明の後、参加企業の皆さんから業界動向や博士の活躍状況等の紹介が行われ、その後、若手研究者の自己スキルポスター発表、企業ブースを訪問しての個別情報交換等が活発に行なわれました。本「赤い糸会」を通して企業に就職した博士研究者のOB、OGも企業説明に参加して、後輩たちに対して熱い思いを語ってくれていました。

興味のある方はS-cubicホームページ（<http://www.sci.hokudai.ac.jp/s-cubic/>）をご覧ください。



岡田理事・副学長の挨拶



企業のショートトーク



若手研究者のポスター発表



企業との個別情報交換

（人材育成本部）

「国際化加速に向けたFD～目指せ！バイリンガル大学～」を実施

国際企画課国際教育連携支援チームは高等教育機能開発総合センターと共催で、12月1日（火）～2日（水）にわたり、標記のテーマでFDを実施しました。

「オランダの大学に学ぶ北大の国際化戦略」と題した第1日目は、計208名（教員160名、職員48名）が参加しました。前半は、2009年8月末に行われたライデン大学・デルフト工科大学でのFDプログラム参加者から、大学院の授業を2005年から英語化した両大学の国際化戦略について報告があり、後半は、本学の国際化戦略の課題と目標について、本堂理事・副学長（国際交流担当）及び脇田理事・副学長（教育担当）からの講演の後、パネルディスカッションが行われました。最後に佐伯総長の講評として、次期中期目標・中期計画の重要なキーワードとして「世界に開かれた大学の実現」及び「世界水準の人材育成システムの確立」が挙げられました。

「やってみよう！英語での授業」と題した第2日目は、計174名（教員164名、職員10名）が参加しました。前半は、工学研究科で実施されている英語での授業に対する日本人学生や留学生からの期待やフィードバックについての講演

のほか、高等教育機能開発総合センターの国際化に関する取り組みについて紹介がありました。後半は、「見てみよう！英語での授業」と題して、本堂理事・副学長が先陣を切り、続いて文学研究科向け英語による授業に関するFDプログラム及びライデン大学FDプログラム参加者を含む4名の教員がデモレッシンを行いました。最後に佐伯総長の講評として、「第1日目はなぜ英語による教育が必要かということから始まり、第2日目は実際の英語による授業について紹介などがありましたが、まずはやってみることが大切で、組織や全体構想を生み出すまでには時間がかかるため、それまでは各教員の努力で実績を作っていただきたい。」と述べられました。

発表資料や報告書などは、ホームページに随時掲載されます。「国際化加速の取組（ダブル・ディグリー、英語による授業のFD等）」をご覧ください。

<http://www.hokudai.ac.jp/bureau/e/wabun/index.html>

本件に関するお問い合わせは、国際企画課国際教育連携支援チームまでお願いいたします。

Email: shien@general.hokudai.ac.jp



佐伯総長の講評



第1日目パネルディスカッション



第2日目本堂理事・副学長（国際交流担当）のデモレッシン



第2日目会場の様子

（学術国際部国際企画課）

学生チームがCOP15学生会議「GREEN CAMPUS」に参加

12月13日（日）、14日（月）の2日間、デンマークのコペンハーゲン大学で開催された学生会議「GREEN CAMPUS」に、公共政策学大学院公共経営コース1年 岡部宇洋さんをリーダーとする、学生チーム8名が参加しました。このイベントは国連気候変動枠組み条約第15回締約国会議（COP15）と連動し、イェール大学とコペンハーゲン大学が共同で開催したものです。また、アメリカ、中国、デンマークなど世界各国から15の大学が参加し、各学生チームは、キャンパスで実行可能な、環境負荷を最小化し持続可能な社会をつくるための方法を発表しました。

本学の学生チームは、冬の暖房使用量が非常に多いという北海道独自の問題を取り上げ、解決方法として、「WARM BIZ」キャンペーン、「使用電力削減コンペ」という2つのアイデアを発表しました。「WARM BIZ」キャンペーンは、人々が楽しみながらライフスタイルを変革することを可能にした「COOL BIZ」キャンペーンを参考に、本学や札幌駅などでの展示やファッションショーを通じて、発展途上であるこの取り組みを広めるアイデアとして

提案しました。また、「使用電力削減コンペ」については、人々の競争心を刺激することによって、自発的なエネルギー削減を可能とする有効な方法として提案しました。

休憩時間には、多くの参加者が他チームの発表内容に質問するなど、積極的な意見交換が行われました。そして、全大学の発表終了後に専門家から、大学内での活動にとどまらず、社会の中における大学の役割を議論して欲しいとの講評がありました。

本学の学生チームは、国籍が違う5人の留学生と3人の日本人学生から構成され、参加した大学の中で最も国際的なチームでした。チームリーダーの岡部さんからは、「メンバーそれぞれの専門分野が違うため、多種多様な意見をまとめることに非常に苦労したが、国際的枠組みが決まる現場を肌で感じられたことは、財産になった。」との感想がありました。また、COP15開催中のコペンハーゲンは、市内各所で環境イベントやデモ活動が行われ、非常にエネルギーッシュな一面を見せてくれるなど、参加した学生にとって大きな刺激となり、国際性を養う良い経験になったと思われます。



ポスター製作の様子



会場での記念写真

(学術国際部国際企画課)

部局ニュース

日韓拠点大学交流事業セミナー及び部局間交流協定調印式を韓国江陵市で開催

去る12月7日(月)から9日(水)の3日間、日韓拠点大学交流事業によるセミナーが韓国江陵市にて、韓国側38名、日本側26名が参加し開催されました。

本セミナーは、日本学術振興会の採択事業「二国間拠点大学交流事業」の一環として、毎年開催地を交互に日本と韓国で開催しています。

10年計画でスタートした日韓拠点大学交流事業も9年目を迎え、毎年約100名もの研究者が共同研究やセミナーを通じ交流を続けています。この中には大学教員や研究者ばかりでなく、将来、この分野で活躍するであろう大学院生なども含まれます。

韓国江陵市は韓国国内でも有数のスルメイカ水揚げ地域であり、函館市と同様に独自の産業が

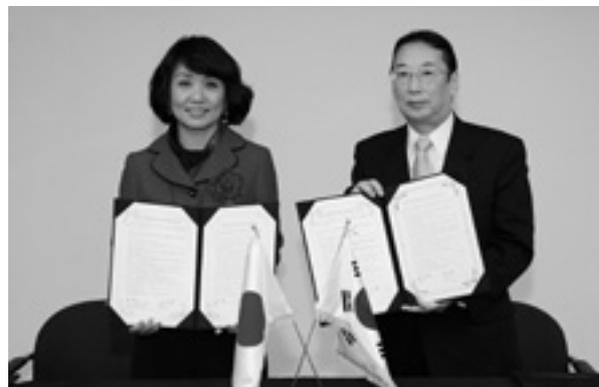
成り立っています。今回のセミナーはスルメイカを題材とし、生産から加工消費に至るまでのプロセスを明らかにし、非環境負荷ゼロエミッション型水産業の実現にどのように寄与していくのかについて活発な討論を行いました。

ハードなスケジュールでしたが、参加者にとって、異文化理解を促進し、水産海洋をめぐる現状を知り、将来の在り方を考えた貴重な3日間になりました。また、今後も大学院生の短期交換留学など、次世代を担う若手研究者のさらなる交流が大いに期待されます。

また、セミナー開会式に先立ち、江陵原州大学校生命科学大学との学術交流協定及び学生交流に関する覚書の調印式が同校で執り行われました。今後、両大学の交流がさらに活発になることが期待されます。



セミナー参加者の記念撮影

調印を終えた
金江陵原州大学校生命科学大学長(左)と原研究院長調印式で記念品を交換する
金江陵原州大学校生命科学大学長(左)と原研究院長

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)

水産科学研究院が函館市との連携協定を締結

水産科学研究院（水産学部）と函館市は、学術・教育・文化及び地域の振興発展に関する各分野の協力関係を深め、双方の発展と充実に寄与することを目的として、12月2日（水）に包括連携協定を締結しました。

函館市役所で行われた調印式では、藤田秀樹函館市企画部参事より協定締結までの経緯について説明が行われた後、関係者が見守る中、原研究院長と西尾正範函館市長による協定の締結がなされました。

今後は、地域の将来を担う人材育成や産学官連携による地域産業の振興、函館市が提唱する函館国際水産・海洋都市構想の推進について、連携・協力を進めることとしています。



協定書調印後、握手する
原研究院長（左）と西尾市長（右）

（水産科学院・水産科学研究院・水産学部）

総合博物館土曜市民セミナー「市民の学びの場としての博物館」が開催される

総合博物館では12月12日（土）土曜市民セミナー「市民の学びの場としての博物館」を開催しました。講師は高等教育機能開発総合センター 木村純教授です。

セミナーでは「社会教育施設としての博物館では市民の学びがどのようにすすめられているのか、近年その活動が多様に発展している博物館ボランティアを含む全国的な動向を紹介しながら、市民の学びの場としての博物館の役割についてお話をします。」と講演され、集まった約60名の市民は熱心に受講していました。



講演する木村純教授

（総合博物館）

触媒化学研究センターが「第24回CRC国際シンポジウム」「第20回研究討論会」を開催

触媒化学研究センターは、「第24回CRC国際シンポジウム」及び「第20回研究討論会」を本学学术交流会館において、12月7日(月)から9日(水)にかけて開催しました。

本センターでは、触媒化学の最先端の研究に携わる著名な国内外の研究者を招待して、触媒化学の特定テーマについての討論を行い、触媒化学における世界的研究拠点としての役割を果たすことを目的として、本センター開設の2年目である平成2年度よりこれらの行事を毎年開催しています。

例年、国内研究者との討論は研究討論会、国外研究者も含めた討論はCRC国際シンポジウムにより開催していますが、今年度は本センターの開設20年目にあたることから、12月7日に開催された触媒化学研究センター創立20周年記念式典に合わせての同時開催となりました。

今回の国際シンポジウム及び研究討論会は、北海道大学GCOEプログラム－触媒が先導する物質科学イノベーション－の支援をいただき、同GCOEプログラム、触媒学会、日本化学会北海道支部、JPIJS北海道東北地区、石油学会北海道支部、電気化学会北海道支部との共催として開催されました。また、北海道大学サステナビリティ・ウィーク2009のポスト企画の位置付けとしても行われました。

12月7日には、触媒化学研究センター創立20周年記念講演会に合わせてポスター・ミキサーが開催され、約80件のポスターで埋め尽くされ

た会場は、活気あふれる雰囲気になりました。

12月8日は“Catalysts and Functional Materials for Energy Conversion (エネルギー変換触媒物質)”をテーマとして、堂免一成教授(東京大学)の記念講演のほか、海外からの4名の招待講演者(アメリカ、ノルウェー、ドイツ)を含む13名の講演が行われ、活発な質疑応答が行われました。講演終了後には、前日のポスター・ミキサーに続いてポスターセッションが開催され、発表者に多くの質問が寄せられました。

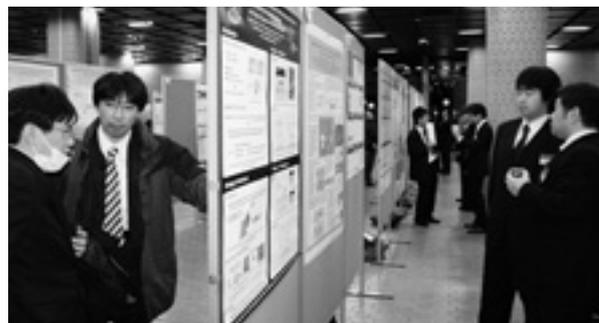
翌12月9日は“Well-defined Surface Structure for Precise Reaction Control (構造の制御された精密表面反応場)”をテーマとして、江口浩一教授(京都大学)の記念講演のほか、海外からの3名の招待講演者(ドイツ、中国、フランス)を含む9名の講演が行われました。最先端の研究者によるハイレベルの講演に、参加者は熱心に聞き入っていました。

3日間にわたり開催された今回の国際シンポジウム及び研究討論会は、総勢約220名の参加者を得て、成功裏に終了しました。

本センターは平成22年度から「触媒化学研究拠点」として、文部科学省の共同利用・共同研究拠点に認定されています。今後も触媒化学の情報発信に努め、世界をリードする中核触媒研究機関として活動していきます。



「第24回CRC国際シンポジウム」、
「第20回研究討論会」参加者一同



ポスターセッション

(触媒化学研究センター)

触媒化学研究センター創立20周年記念行事を開催

去る12月7日（月）に、本学学術交流会館及び京王プラザホテル札幌において、学内外から多数の関係者が出席し、触媒化学研究センター創立20周年記念講演会、式典、祝賀会が開催されました。

記念講演会は本学学術交流会館において学内外から約150名が出席し、上田センター長による開会の挨拶に続いて、岩澤康裕電気通信大学教授・東京大学名誉教授・日本学術会議第三部部長から「日本の学術と触媒研究の変革」、今成真独立行政法人科学技術振興機構イノベーション推進本部開発主監から「日本の化学産業と触媒技術のこれから」、巽和行名古屋大学物質科学国際研究センター長から「化学研究：基礎と応用」、Can Li中国触媒国家重点研究室長から「The Vital Role of Catalysis Played in Developing Clean and Renewable Energy」、岡田本学理事・副学長から「北海道大学の研究戦略と触媒化学研究センターへの期待」と題した講演が行われました。講演において、これまで人類の生活基盤の格段の向上をもたらしてきた「触媒」は、今後、持続可能社会を構築する上でのキーテクノロジーであり、より高度な学術として進化・応用を図らなければならないとの一致した認識のもと、その推進役として触媒化学研究センターの役割は大きいとの意見が出されました。

講演会後、同会館において記念式典が開催され、上田センター長による開式の辞に続いて、佐伯本学総長の挨拶及び勝野頼彦文部科学省研究振興局学術機関課長の来賓挨拶が述べられ、その後、これまで同センターの運営委員会委員として同センターの運営に寄与してきた、御園生誠独立行政法人科学技術振興機構総務部PO研修主監、廣田襄京都大学名誉教授、武笠幸一本学名誉教授、西則雄本学名誉教授及び嶋田志郎本学工学研究科教授（当日欠席）に感謝状が授与されました。代表して挨拶を述べた御園生誠氏から発足当時の生みの苦しみから今日までの発展を振り返り、今後へのさらなる期待が表明されました。

式典終了後、京王プラザホテル札幌において、来賓、教職員、OB等約120名が集い、祝賀会が盛大に催され、触媒化学研究センター創立20周年の歩みを振り返りました。会はセンター長の挨拶に始まり、岩澤康裕電気通信大学教授・東京大学名誉教授・日本学術会議第三部部長及び内本喜晴京都大学大学院人間・環境学研究科教授・本学触媒化学研究センター客員教授の祝辞が述べられ、その後、佐伯総長や東市郎元本学触媒化学研究センター長等のテーブルスピーチが行われ、和やかな歓談のひとつとなりました。



講演する岩澤電気通信大学教授



式辞を述べる上田触媒化学研究センター長



挨拶を述べる佐伯総長

来賓挨拶を述べる
勝野文部科学省研究振興局学術機関課長

(触媒化学研究センター)

経済学研究科会計専門職大学院特別セミナーを開催

経済学研究科会計専門職大学院では、12月18日(金)午前10時30分より経済学研究科大会議室において、講師に公認会計士・監査審査会常勤委員脇田良一氏を迎え、「監査の品質管理」というテーマで、特別セミナーを開催しました。

公認会計士・監査審査会は、金融庁に設置され、公認会計士試験の実施のほか、公認会計士および監査法人の行う監査の品質について、審査及び検査を行っています。脇田委員は、同審査会の設置以来約6年にわたる経験を踏まえ、

現状の監査の品質管理についての問題点を、実際の監査法人の処分勧告事例を交えながら講じられました。長らく明治学院大学で教鞭を執られ、同大学学長も歴任された脇田委員の語り口はたいへんわかりやすく、参加した学生にもたいへん好評でした。

経済学研究科会計専門職大学院では、学生が実務に触れる機会を多く持ってもらいたいと考えており、今後も引き続きこのようなセミナーなどを開催していきます。



公認会計士・監査審査会常勤委員 脇田良一氏



特別セミナーの様子

(経済学研究科・経済学部)

農学研究院に(財)発酵研究所による寄附分野設置 —微生物新機能開発学分野—

このたび、平成21年10月1日付けで、農学研究院に寄附分野として「微生物新機能開発学分野」が設置されました。財団法人発酵研究所の寄附金により開設されたもので、設置期間は、平成21年10月1日から平成26年9月30日までの5年間となっています。

本寄附分野では、微生物の様々な生理状態（覚醒・休眠・死）を理解・制御するための新しい知識や技術を集積し、これまでに培養できなかった未知未培養微生物を培養化する手法、微生物の死や休眠を判定する手法、微生物が持つ潜在的な機能発現を誘導する手法などを開発します。このような研究を通して、微生物の生き様を理解し、微生物の産業への利活用・有用微生物の保存技術へ貢献することを目指しています。

寄附分野教員として、客員教授に鎌形洋一氏

（産業技術総合研究所）、特任准教授に田中みち子氏、寄附講座等教員に北川航氏（産業技術総合研究所）が就任され、本研究院のみならず関係部局の研究者と協力し、研究の推進や大学院生の指導にあたっています。

12月8日（火）には、農学部大講堂において開設式が行われ、本学佐伯総長より寄附者である財団法人発酵研究所常務理事 中濱一雄氏に感謝状が贈呈されました。開設式に引き続き「北大の研究者たちがつむぐ微生物の世界」と題し、本学において微生物研究を行う学部・研究院を超えた12名の研究者の方々を講演者として迎え、記念講演会が行われました。さらに、ファカルティハウスエンレイソウにおいて懇親会が開催され、参加者の間で意見交換や交流が行われた後、本寄附分野の今後の発展を祈念いたしました。

微生物新機能開発学分野ホームページ：<http://www.agr.hokudai.ac.jp/biseibutushinkino/>



佐伯総長より(財)発酵研究所 中濱常務理事へ
感謝状贈呈



記念講演会

（農学院・農学研究院・農学部）

低温科学研究所技術部で「第2回技術部セミナー」 及び「第15回技術発表会」を開催

去る12月11日(金)、低温科学研究所講義室において低温科学研究所技術部主催・教育研究支援本部共催による「第2回技術部セミナー」及び「第15回技術発表会」が開催されました。のべ50名を超える所内外の研究者・学生・事務職員・技術職員が参加し、活発な議論が行われました。

セミナーでは、分子科学研究所と九州大学応用力学研究所から3人の講師の方々を招聘し、講師の方々が所属する技術部の仕事内容と低温

研技術部では扱っていない様々な技術について講演していただきました。発表会では、10件の低温研技術部が関わった研究発表や技術報告が行われました。

本発表会の内容をまとめた「北海道大学低温科学研究所技術部技術報告第15号」を発行しました。詳しい内容は本研究所技術部ウェブサイト(<http://www.lowtem.hokudai.ac.jp/tech/>)でも閲覧できます。



江淵技術部長の挨拶



技術発表会風景

(低温科学研究所)

第7回脳科学研究教育センター・シンポジウム 「脳の個性を科学する：遺伝子と環境がつくる脳の力」

12月8日（火）、9日（水）の両日、第7回脳科学研究教育センター・シンポジウム「脳の個性を科学する：遺伝子と環境がつくる脳の力」（世話人代表：医学研究科 教授 本間さと）が本学学術交流会館で開催され、研究者や学生に一般市民も含め、延べ212人の参加を得、成功裏に終了しました。

北海道大学脳科学研究教育センターは、文部科学省「萌芽・融合研究開発プログラム」の予算措置を受け、文理融合型研究教育拠点として平成15年に設置され、本学の12部局に所属する30名を超える基幹教員を中心に融合的脳科学研究を推進するとともに、部局横断型のバーチャル専攻科「発達脳科学専攻」において、修士及び博士課程大学院生への系統的な脳科学教育プログラムを提供しています。本年度で7回目を迎えたセンター・シンポジウムは、毎年テーマを決め、センター履修生の教育に資すると共に、学内外に脳科学研究の最前線を示す機会となっています。本年度のシンポジウムは、特に、昨年6月に文部科学大臣の諮問に答えた「長期的展望に立つ脳科学研究の基本的構想及び推進方策について」が答申されたことを受け、この中で特に重点的に推進すべき課題と挙げられた「心身の健康維持のための脳科学」を主要テーマとして行われました。このため、総長室重点配分経費「全国規模研究集会等の開催支援経費」の支援を受け、第一線で活躍中の研究者を全国から招待し、センター基幹教員を交えて、脳機能の遺伝子プログラムと環境による修飾や、ストレス社会における精神神経の健康維持に関して、発達期から老年期までヒトの生涯を視野に入れたプログラムを企画しました。また、我が国における脳科学研究の指導的立場にある、日本学術会議会長の金澤一郎先生をお招きし、特別講演が行われました。

8日は、佐伯総長の挨拶に続き、本間研一センター長による脳科学研究教育センターの過去7年の歩みと、脳科学研究の現状、今後のセン

ターの方針についての基調報告がありました。引き続き「脳とエピジェネティク」「行動異常の分子基盤」の2つのシンポジウムが行われ、発達期の環境要因や母子関係、様々な行動障害を引き起こす分子メカニズムと環境要因の最新研究成果が発表され、遺伝子障害による「ストーカーマウス」、「子育て放棄マウス」などのムービーも示され、社会的要請の高い課題への脳科学からアプローチが示されました。18時からの金澤先生の特別講演「脳科学と社会」では、我が国の脳科学研究の推進発展の歴史に始まり、クイズ形式で巷にはびこる疑似科学と、エビデンスに基づくサイエンスとしての脳科学との差異を示すなど、脳科学を身近に感じる講演が行われました。一般市民からのユニークな質疑も加わり、満席の聴衆は脳科学に関する様々な誤解を改め、知識を新たにしました。

9日には「脳の個体差と環境要因」「脳科学の新展開」の2つのシンポジウムが行われました。我が国は11年間連続で3万人を越す年間自殺者数（交通事故死の実に6倍）を記録し、また、最近の統計では、国民の4人に1人は睡眠不足を感じ、働き盛りの6割が日常的にストレスを感じています。これらのシンポジウムでは、現代社会に蔓延するストレス・不眠、うつや生活習慣病を引き起こす脳のメカニズムと、これらの解明のための先端技術開発の成果が発表されました。

現在、脳科学は、生命科学領域にとどまらず、情報科学・工学、社会科学や人文科学など広汎な領域にまたがる真の総合科学となっています。脳科学に対する社会的期待も益々高まっており、活力ある人生の創造に資することが求められています。身体の諸機能を統合して生涯にわたる心身の健康を支える脳の機能について、研究者間の情報交換と、学生のみならず一般市民への教育の目的も果たした本シンポジウムの成果を、今後のセンターの発展につなげたいです。



佐伯総長の挨拶



特別講演をされる金澤一郎先生



岡田理事・副学長（前列左から4人目）も加わり、
講演者・主催者一同

(脳科学研究教育センター)

水産学部キャンパス・北農寮間を結ぶ連絡バスの試験運行始まる！

水産学部では、12月1日（火）より、学部キャンパスと北農寮を直通で結ぶ連絡バスの試験運行を開始しました。

函館キャンパスは、学部と学生寮の距離が離れていて、公共交通機関も少ないことで多くの寮生は通学に不便を強いられており、また、これが一因となって入寮希望者が少ないと考えられるため、原学部長より通学環境の改善を図るようとの指示を受けていくつかの対応策を検討してきましたが、この度、函館地域で路線バスを運行している函館バス（株）に委託して、2月19日（金）までの平日の計39日間にわたって連絡バスを運行することとなりました。

この連絡バスは、朝便が北農寮午前8時30分発の1本、夜間便が学部午後10時発の1本の1日2本の運行ダイヤとなっており、市内路線を走っている中型車輛を使用して学部と北農寮の

間を約15分で結ぶものです。

12月1日の初日には、朝便に13人、夜間便に9人の乗車がありましたが、これから迎える積雪期には、自転車通学から連絡バスへの転向組が見込まれることから、乗車人数が増えるものと予想されています。

また、水産学部図書室が閉館する午後8時から連絡バスの発車時刻の午後10時までの間は、補助暖房設備がある「キャリア支援室」を開放して、待ち時間を有効活用した自学習ができるように配慮しています。

今後、水産学部では、今年度の運行状況やアンケート結果を分析・検討し、かつ、連絡バス運行による入寮希望者数の動向などを踏まえて、来年度以降における本格運行の是非を判断することとしています。



初日の朝便に乗り込む学生たち



バスから降りて講義に向かう学生たち



初日の夜間便に乗り込む学生



発車を待つ車内の風景

(水産科学院・水産科学研究所・水産学部)

体験学習教室「サケは海からの贈り物」を開催

水産科学研究院では、12月13日(日)、小中学生を対象とした体験学習教室「サケは海からの贈り物：小中学生のためのサケとワシの観察会」を開催しました。

これは、独立行政法人科学技術振興機構(JST)が実施する「平成21年度地域の科学舎推進事業地域活動支援」に本研究院の関秀司教授が代表者となり申請・採択され、同機構の経費支援のもとに実施されたものです。

講師は、本研究院の帰山雅秀教授、矢部衛教授、工藤秀明准教授、清水宗敬講師が務めました。当日は天候にも恵まれ、函館近郊の小中学生及びその保護者あわせて、定員を超える34名が参加しました。

午前中は、シロザケの自然産卵で有名な八雲町遊楽部(ユーラップ)川でフィールドワーク

を行いました。講師の指導のもと実際に河川敷に入り、サケの産卵行動や産卵床などを観察して、サケの産卵に適した川の環境について学びました。また、産卵後のサケの死体を目当てに集まるオオワシやオジロワシの行動を、フィールドスコープを使って観察しました。

午後からは、八雲町総合保健福祉施設シルバープラザで、帰山教授が、陸と海との物質循環を含めた生態系におけるサケの役割についての授業を行いました。終了後には参加者から「なぜサケは産まれた川に戻ってくるのか」など多くの質問があり、活発な質疑応答の時間となりました。

北海道を代表する魚であるサケの生態の学習を通して、参加者は水産科学への理解を深めていました。



フィールドスコープ・双眼鏡を使って
オオワシやオジロワシの観察



遊楽部川河川敷でサケの遡上行動や産卵床の観察



サケのスケッチの様子



帰山教授によるサケ教室の様子

(水産科学院・水産科学研究院・水産学部)

横浜港大棧橋碇泊中の学部附属練習船おしよる丸で「水産学部進学説明会 in 横浜」を開催

水産学部では、12月12日（土）に、本学部の入学試験の説明や教育研究内容などを紹介する進学説明会を、横浜港大棧橋埠頭Dに碇泊中の学部附属練習船おしよる丸を会場に開催しました。なお、練習船おしよる丸は、日本大学生物資源科学部との共同利用航海のために横浜港に寄港したものです。

この説明会には、原学部長をはじめ教職員10名、学部学生・大学院生など10名及び高木船長以下おしよる丸乗組員が運営にあたりましたが、本説明会開催の情報を聞きつけて来船した多数の卒業生の協力も得て実施されました。

開催にあたっては、本学部に入学者実績を有する神奈川県・東京都・埼玉県の約200校の高等学校に開催案内を事前に送付し、学部ホームページに本説明会のサイトを立ち上げてPRに努めましたが、初めての試みでもあり何人の人たちに来場していただけるのか不安な気持ちを持って受付を開始したところ、間もなく都立高校の女子生徒とその父親の2人を皮切りに、好天に恵まれたこともあり午前10時から午後3時までの開催時間中に計62名の来場者がありました。

また、通常は客船しか使用しない大棧橋に漁船型のおしよる丸が碇泊している珍しさからか、みなとみらい21をバックに写真を撮る行人の姿が多く見受けられるなど、おしよる丸の存在をアピールする絶好の機会ともなりました。

説明会では、学部紹介、進学相談コーナー、研究紹介、船内見学などの企画を実施しましたが、現役学生や卒業生から学生生活の実態に関する生の声を聞きつつ研究紹介を兼ねた実験やパネル展示に興味深く見入り、また、普段は立ち入ることができないブリッジや貴重な観測機器などを熱心に見学していました。

進学相談コーナーでは、来場した約半数の高校生が立ち寄り、担当教員に様々な疑問・質問等を問いかけて2時間近くも個別相談をしていた親子連れもあり、本説明会参加を通じて北大水産学部への進学に対する決意を新たにして会場を後にする生徒が多くいたことで、本説明会の開催効果を実感するとともに、水産学部の魅力を受験生にPRすることの重要性を再認識した説明会となりました。



横浜港大棧橋に碇泊中のおしよる丸



埠頭入構ゲート附近の様子



学生の説明に聞き入る親子連れ



進学相談コーナーでの一コマ

(水産科学院・水産科学研究所・水産学部)

水産学部附属練習船おしよろ丸に“さかなクン” 現る！

日本大学生物資源科学部との共同利用航海及び「水産学部進学説明会in横浜」実施のために横浜港大棧橋に碇泊中の附属練習船おしよろ丸に、12月11日(金)夜、“さかなクン”が出現しました。

これは、附属練習船おしよろ丸士官の阿部三等航海士と“さかなクン”が魚類分類を志す同じ研究者であり、また、同じ趣味を持つ友人として親交があることから、“さかなクン”が阿部三航士を訪ねてきたものです。

“さかなクン”は、トレードマークのあの帽子を被り、おしよろ丸船内の設備や船長などの話に、見るもの聞くもの全てに「ギョッ、

ギョッ」と驚きの連続でした。

また、学生教室に立ち寄った際には、おしよろ丸で採集した魚類の古い図鑑を手にした“さかなクン”と阿部三航士は、2人の世界に没頭して、周囲の同行者は、あまりにもマニアックな2人の会話についていけないコマもありました。

約1時間半の船内見学を体験した“さかなクン”は、来年の小笠原航海への乗船希望と学生教室白板へのイラストを残し、最後に、強い雨が降る中の船外での記念写真撮影をして帰って行きました。



高木おしよろ丸船長の説明に「ギョッ」とする“さかなクン”



2人の世界に浸る“さかなクン”と阿部三航士

(水産科学院・水産科学研究所・水産学部)

工学部で「心のケアに関する講習会」を開催

工学部では、去る12月17日(木)及び21日(月)に心のケアに関する講習会を開催しました。

今回は、メンタルアシスト北海道よりカウンセラーの石原一人氏を講師として招き、講習を行いました。

17日には、「メンタル不調者への対応～心の悩みを抱えた人をケアするには～」と題し、身の周りにメンタル不調者がいる場合の対応を学ぶため、参加者による傾聴法のトレーニング等を行い、50名が参加しました。

21日には、「心のトラブルを知って下さい。その仕草はもしかして…」と題し、心のトラブルにはどのようなものがあるのか・トラブルを抱えた人は周囲にどんなサインを発しているのかをテーマとして講義形式で行い、36名が参加しました。

今回の講習会は教員が参加しやすいよう、講義がある時間帯を避け、両日とも午後6時15分からの開催としたところ、多くの教職員・学生が参加し、また講師への質問も多数あり、メンタルヘルスケアに対する関心の高さを再認識しました。

大学関係者は研究に没頭するあまり、人々との繋がりが薄れ、メンタル不調となることが懸念されます。メンタルヘルスケアには医師やカウンセラー等専門家のサポートはもちろんのこと、不調者の周りにいる方の協力も不可欠です。工学部では啓発のため、今後も継続して講習会を開催していく予定です。



当日の様相

(工学研究科・工学部)

「平成21年度第1回獣医学研究科FD講演会」を開催

12月17日(木)午後4時から獣医学研究科第2講義室において、獣医学研究科FD委員会の主催による、獣医学研究科教職員を対象としたFD講演会が実施されました。

昆獣医学研究科副研究科長の挨拶に引き続き、高等教育機能開発総合センター高等教育開発研究部 細川敏幸教授による「北大FDの歴史と教育の未来」と題する講演が行われました。

講演では、FDの定義と大学設置基準によりFD研修が義務づけられた背景について説明があった後、本学各研究科でのFD活動の取組に

ついて事例紹介が行われました。また、我が国の大学教育の課題、教員と学生を繋ぐシラバスの作成とその実行の重要性について述べられました。

講演後は、FD研修で教員がなすべきこと、教育の質の保証はどのようにすべきか等について質疑応答が行われました。

FD参加者からのアンケートでは、講演内容についての感想や意見と共に、今後のFD活動に参考となる意見も多く寄せられました。



昆副研究科長挨拶



細川教授講演風景

(獣医学研究科・獣医学部)

第28回遊戯会仮装「明治桃太郎害虫駆除」写真を 大学文書館で受贈

1月5日(火)、大学文書館では、第28回遊戯会写真1点を、持田誠氏からご寄贈いただきました。受贈写真は、1910(明治43)年5月7日、東北帝国大学農科大学の第28回遊戯会で、農学実科生徒が披露した仮装行列「明治桃太郎害虫駆除」の記念写真です。撮影場所は、第一農場内の燻腿室、大工及鍛冶場、鶏舎の南側です。現在の理学部3号館北側にあたります。

遊戯会は、1878(明治11)年札幌農学校の外国人教師の提案により開かれている運動会で、札幌の年中行事のひとつでした。各種競技のほか、仮装行列などの余興が行われ、観客の目を喜ばせていました。

受贈写真は、本間豊明(農学実科1912年卒業)の旧蔵写真です。仮装衣裳31点のうち20点

は本間豊明が製作した力作です。仮装行列は、捕虫器を先頭に、被害にあった玉葱、西瓜、豆、大根等の農作物が悄然と従いました。次に、昆虫学専門の松村松年教授を模した、頭に「マツムラ液」という薬瓶を載せたフロックコートの紳士が害虫駆除剤たちを伴って登場し、散粉器、じょうろの武者がイナゴ、ワタムシ、カミキリムシ、毛虫、カイガラムシ等の害虫を太縄に縛って進みました。最後尾には、虫害を救われたリンゴ、豆、米俵等が喜び踊って続き、観客席からは大歓声があがったと伝わっています(『文武会会報』第60号)。

今後、大学文書館では、受贈写真を大学沿革資料として大切に保管するとともに、閲覧・展示等により活用いたします。



農学実科生徒の仮装「明治桃太郎害虫駆除」(1910年)
本間豊明は頭にじょうろ、腰に大小の刀をさした武者役

(大学文書館)

総合博物館がカイザースラウテルンで開催された 標本展示に協力

総合博物館は平成21年11月にゼンケンベルグ自然史博物館及びストラスブール動物学博物館と学术交流協定を締結しました。（北大時報平成21年12月号参照）。その後12月にかけて、協定締結後初めての3館共同事業が開催されました。

3館共同事業とは、ドイツの小都市カイザースラウテルン（Kaiserslautern）と日本との交流130年を記念して11月20日（金）から12月18日（金）までの同市の地方銀行Kreissparkasse本店で開催された“Ludwig Döderlein und die Seesterne von Enoshima”（ルードウィッヒ・デーデルラインと江ノ島のヒトデ）と題する共同展示です。東京大学のお雇い外国人教師として1879（明治12）年に来日したデーデルラインが主に相模湾で収集した動物標本を3館が共同で研究したことが学术交流協定締結の原動力となり、今回の展示はその延長線上、つまり3館学术交流における初の共同事業だったわけです。この展示にちなんで“Seesterne aus Enoshima”（江ノ島のヒトデ）と題する約100ページの解説本も出版されました。

さて、カイザースラウテルンは、フランクフルトの南西、フランスとの国境近くに位置し、2006 FIFAワールドカップにおける1次リーグ・グループFの日本対オーストラリア戦が行われたことで日本でも一躍有名になった人口10万人ほどの美しい小都市です。デーデルラインの義父イエアン・シェーンは羊毛糸紡績工場の工場長として同市の経済発展に大きく貢献し、当時のその家族の住居跡は現在「カイザースラウテルン日本庭園」となっていること、そして、デーデルラインの夜叉孫が現在居住していること等々が今回の展示をもたらしました。ドイツ国鉄のカイザースラウテルン中央駅から繁華街を横切って15分も歩くとKreissparkasse本

店に着きます。本店の近代的な建物を入るとまず、吹き抜けのロビー正面受付カウンターの上壁に掲げられたタカアシガニのつがい標本が目に入ります。このデーデルライン収集標本は現在ストラスブール動物学博物館が所有しているもので、その一見異様な姿と近代的な銀行のロビーに飾られたクリスマスツリーとの mismatch が目を引きます。このような奇抜な展示を行う勇気のある銀行は日本にはないかもしれません。タカアシガニ標本からロビーに目を転じると、そこかしこに置かれた背の高いガラスケースの中に、様々な日本産動物の標本及び写真、デーデルラインゆかりの品々、日本の分類学者たちの研究報告書、学術論文、書籍等々が展示されています。銀行を訪れたお客さんたちの多くが立ち止まって展示を興味深く見ている姿が印象的でした。この展示は、ゼンケンベルグ自然史博物館のJoachim Sholz博士、ストラスブール動物学博物館のMarie-Dominique Wandhammer館長、そして本学総合博物館の馬渡館長の共同企画で実現したものです。

馬渡館長が同市を訪れた12月2日（水）には記念講演会が開催され、昭和天皇が収集された相模湾産動物標本を所蔵している国立科学博物館筑波研究資料センターの並河洋博士がデーデルラインと昭和天皇の収集標本の関連について講演しました。講演会終了後のパーティーで関係者一同は展示の成功を祝い、再会を約束しました。今回の共同展示は、学术交流協定の締結が総合博物館のグローバル化及び今後の発展に大きくプラスすることを示しました。総合博物館はこれから、様々な分野の研究者・学生の交流、あるいは貴重な標本の交換等々、2館との間で実質的な交流を深めることで、北海道大学における文化の発展に寄与したいと考えています。



カイザースラウテルン Kreissparkasse 本店正面玄関
「ルードウィッヒ・デーデルラインと江ノ島のヒトデ展」の
ポスターが貼ってある。



カイザースラウテルン Kreissparkasse 本店ロビー
に展示された昭和天皇の御著書「相模湾のヒドロ
虫類」とデーデルライン収集のヒドロ虫標本



カイザースラウテルン Kreissparkasse 本店ロビー
に展示された標本やデーデルラインゆかりの品々



「ルードウィッヒ・デーデルラインと
江ノ島のヒトデ展」のチラシ表紙



カイザースラウテルン Kreissparkasse 本店ロビー
の受付カウンターに展示された
デーデルライン収集タカアシガニ標本



今回の共同企画展示の関係者たち

左から馬渡駿介総合博物館館長、カイザースラウテルン工科大学
Dr. Hanns Stephan Wüst 教授、デーデルラインの夜叉孫 Dr. Klaus
Döderlein, “Seesterne aus Enoshima” (江ノ島のヒトデ) の出版社
代表 Frau Karin Afshar, ゼンケンベルグ自然史博物館の Dr. Joachim
Sholz, 今回の企画で独日・日独の翻訳を一手に引き受けてくれた
オオツキミズホさん, Kreissparkasse の経営陣のお一人 Herrn Kai
Landes, そして国立科学博物館筑波研究資料センターの並河洋博士

(総合博物館)

平成21年度北海道大学教育GPシンポジウム 「大学博物館から拓く学生教育の未来2」開催

平成21年度の北海道大学教育GPシンポジウムは、「大学博物館から拓く学生教育の未来2」と題し、東京大学総合研究博物館・特任准教授の松本文夫氏、広島大学総合博物館・学芸職員の清水則雄氏を講師として迎え、他大学の博物館の教育普及活動を紹介しながら、本取り組みとの比較、検討を行い、大学博物館の持つ教育機能についての課題を議論し、明確化することを目的に、12月19日（土）に開催されました。

シンポジウムでは、まず、松本先生より「教育活動のデザインー問題解決から価値創造へ」と題し、「問題解決（与えられた問いに答えること）」から「価値創造（新たな問題を提起すること）」へと向かう東大総合研究博物館の教育活動の事例として、「全学体験ゼミナール（建築デザイン実習）」（分野横断型の体験授業）、「UMUTオープンラボ（「建築模型の博物館都市」展）」（学生主体の動態展示）、「東大総合研究博物館学芸員専修コース」（協働創造型の社会人教育）、「博物館工学ゼミナール」（問題探求型の実践教育）などについて講演していただきました。次いで、清水先生より「広島大学総合博物館におけるエコキャン

パスの取組と学生教育」と題し、低予算・小規模の第2世代の大学博物館である広島大学総合博物館が誕生するに至るまでの苦労話や、低予算・小規模な大学博物館だからこそできた「大学まるごと博物館」、各部局の教員や事務局との連携によるサテライト展示・エコミュージアム、地域連携センターとの連携によるキャンパスツアーと学生キャンパスガイドなどについて講演していただきました。最後に、北大総合博物館の取り組みとして、「北大教育GP・社会体験型科目の挑戦ーHoUM Tシャツ制作プロジェクトを事例として」と題しての講演がありました。まず、湯浅先生より、北大の教育GPの概要と、卒論ポスター発表会や学生参加プロジェクトなどの取組が紹介され、その後、小俣先生より、「HoUMオリジナルTシャツデザインプロジェクト」の概要、日程、作業内容などについてお話しいただき、さらに、実際に、プロジェクトに参加した学生2名から、自分で制作したものを商品化する体験ができた、北大総合博物館を再発見することができた、Tシャツ制作の苦労、ベストを尽くすということの大切さを知った、などの感想をいただきました。



ポスター



シンポジウムの様子

(総合博物館)

総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催

総合博物館では、平成16年より、「準分類学者（パラタクソノミスト）養成講座」を開講しています。各講座修了者「準分類学修了証」を発行しており、大学生・大学院生の教養教育の場として、博物館ボランティアや環境調査会社

職員のスキルアップの場として、そして、学芸員・教員・自然観察指導員のリカレント教育の場として、利用されています。11月および12月には下記の日程で、8つの講座を開催しました。

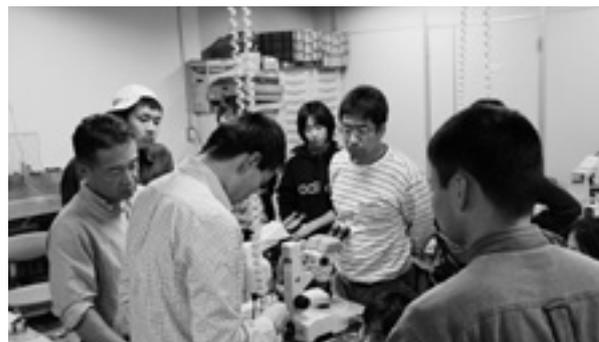
植物パラタクソノミスト養成講座（初級：コケ植物）

11月7日（土）に、斜里町立知床博物館学芸員の内田暁友氏を講師に迎え、総合博物館において開催されました。今年は、定員の3倍近くの応募があり、厳正な選考を経て、12名が参加しました。

午前中は、コケ植物についての基本的な講義が行われ、美しい写真と共にコケ植物の魅力が紹介されました。また、講師が採集したゼニゴケ類を見ながら、コケの体のつくり等を観察しました。

午後からは、まず、生物顕微鏡で観察するため、ケラー照明による顕微鏡のセッティングを行い、スギゴケ（セン類）の標本の乾燥状態と水で戻した状態を観察した後、葉を実体顕微鏡で観察しました。また、実体顕微鏡下でカミソリの刃を用いて葉の横断面切片を作る実習を行い、受講生は苦勞しながらも同定に必要な横断面の特徴が分かるような切片を作成しまし

た。その後、トサカゴケ（タイ類）の花被（造卵器）、造精器の様子を実体顕微鏡で観察し、最後にイボミズゴケ（セン類）の葉の細胞配列や「イボ」を生物顕微鏡で観察した後、染色液メチレンブルーを用いて葉を染色し、「孔」を観察する方法を実演していただきました。



植物パラタクソノミスト養成講座(初級:コケ植物)において作業の指導をする内田講師と参加者

石器パラタクソノミスト養成講座（中級）

11月14日（土）に、本学埋蔵文化財調査室助教の高倉純氏を講師に迎え、総合博物館において開催されました。昨年初めて開催された石器（初級）を受け、今年は、石器（中級）が開催されました。

午前中は、石器に残された物理的特徴を考古学者はどのように読み取るかを説明しました。そして、石器を観察した後、その形態や物理的特徴を実測（スケッチ）しました。午後からは、石器の技術的・形態的特徴に沿って分類作業を行い、専門用語を使いながら記述しました。そして、最後に、受講者自ら原石を打ち割り、石器作りを体験しました。

この講座を通して、考古学者が先史時代の生

活や文化を復元するために実施する石器の研究方法を学ぶことができました。



石器パラタクソノミスト養成講座(中級)において石器作りに取り組む参加者

岩石パラタクソノミスト養成講座（中級）

11月21日（土）と22日（日）の両日、当館資料部研究員の在田一則氏を講師に迎え、総合博物館において開催されました。

1日目の午前中は、プレートテクトニクスについての説明や、岩石のでき方、できる場所についての講義が行われました。その後、午後からの実習に向けてその手順についての説明を受けました。また、午後からは、上皿天秤を使って、岩石の密度を測定する実習を行いました。この実習で、岩石の種類と密度には、大きな関係があることを体感しました。その後、偏光顕微鏡という特殊な顕微鏡を使うために必要な光学的な基礎知識についての講義を受け、実際に偏光顕微鏡を用いて岩石の薄片を観察する実習も行いました。

2日目は、1日目に引き続き、偏光顕微鏡を使って岩石を見分ける実習を行いました。偏光顕微鏡を使って、様々な種類の岩石の薄片を観

察し、主要な鉱物を見分ける方法について実習しました。わからない鉱物がでてくると、参加者は個別に質問し、講師に解説していただき、理解を深めました。また、薄片の中から、好きなものを選び、スケッチすることにも挑戦しました。



岩石パラタクソノミスト養成講座(中級)において偏光顕微鏡を用いた実習に取り組む参加者

土器パラタクソノミスト養成講座（中級）

11月29日（日）に、当館資料部研究員の小野裕子氏を講師に迎え、総合博物館において開催されました。今年の春初めて開催された土器（初級）に参加された方を含め、7名が参加しました。

午前中は、まず、「縄文文化の日本列島と北海道」と題して、縄文文化についての概説的な講義が行われ、縄文文化成立の背景となった「地球環境の変化」や「様々な要素を持った人々の日本列島への定住」などについて詳しく学びました。また、縄文土器の縄文をつける（施文）ための道具（原体）やその方法についても講義されました。そして、午後から、側面圧痕と回転圧痕を施文し、観察するため、繊維を撚って縄（原体）を作成し、実体顕微鏡で観察しながらスケッチしました。

午後からは、まず、ウッディ粘土を用いて、午前中に作成した原体を押しつけ、ころがし、施文し、側面圧痕と回転圧痕を観察する実習を行いました。どのような原体をどちらの方向に転がしたかを読み取れないと、土器の縄文を観

察できないことを体験的に学びました。次に、実践編・応用編として、講師が用意した4つの土器文様を観察し、どのような原体を用いて、どのようにして施文したかを読み取り、手元にある原体を用いて同じ文様を粘土に施文する実習を行いました。また、「絡状体」や3段の撚り縄の作成と、その側面圧痕や回転圧痕の施文、観察も行いました。



土器パラタクソノミスト養成講座(中級)において解説する小野講師

鉱物パラタクソノミスト養成講座（中級）

12月5日（土）と6日（日）の両日，大学院理学研究院講師の三浦裕行氏を講師に迎え，X線回析装置を用いて肉眼鑑定ではわからない鉱物を同定する方法について学びました。本講座は，9名を2組に分け，1日講座を2回開催する形で行われました。

午前中は，鉱物の結晶構造を解く際に使われるX線回析の基本的な考え方や，X線回析装置の簡単な仕様についての講義が行われました。その後，肉眼鑑定ではわからない鉱物をX線回析で同定する方法について，演習を交えながら説明を受けました。

午後からは，粉末X線回析装置を用いて，参加者が持参したサンプルをX線回析し，データを測定しました。その後，測定データをもと

に，参考書などを用いて各サンプルの鉱物相の同定に挑戦しました。



鉱物パラタクソノミスト養成講座（中級）
においてX線回析装置を用いた実習に取り組む
参加者と三浦講師

DNA 実験パラタクソノミスト養成講座（初級）

12月5日（土）と6日（日）の両日，当館資料部研究員の小林憲生氏と館卓司氏を講師に迎え，総合博物館と理学研究院において開催されました。今年度初めて開催された講座でしたが，定員の2倍以上の応募があり，4名が参加しました。

1日目の午前中は，理学部の実験室にて，機器類の具体的な使用方法や注意点などの説明を受け，各自2種類のショウジョウバエをサンプルにしてDNAを抽出する実習を行いました。午後からは，午前中に抽出したDNA内の目的領域を増幅させる実験を行い，その後，翌日の実習に向け，実験結果をチェックし，実験から得られた産物を精製する方法や塩基配列決定に関する説明を受けました。

2日目は，午前中に，1日目に抽出し，目的領域を増幅させたサンプルを精製し，塩基配列

を決める機械にセットした後，配列が得られた場合の比較方法や系統を推定するためのソフトウェアについての解説を受けました。午後からは，各自のデータを回収して，全員のデータを使って比較や解析を行いました。



DNA 実験パラタクソノミスト養成講座（初級）
において実習に取り組む参加者

鉱床パラタクソノミスト養成講座（中級）

12月12日（土）と13日（日）の両日、当館教授の松枝大治氏と当館研究生の鳥本准司氏を講師に迎え、総合博物館において開催され、8名が参加しました。

1日目は、まず、鉱床序論として、レアメタル・クライシスや環境問題、水資源問題などの身近な問題をからめながら、鉱床学の基礎知識等に関する講義を受け、午後からは、身の回りに潜む鉱物や鉱石についての話や北海道の鉱石・鉱床に関する話を数多く聞きながら、博物館見学を行いました。その後、それぞれの鉱石にまつわる様々な話とともに、標本観察を行いました。

2日目は、まず、午前中に、偏光顕微鏡の構造や原理、使用方法、そして鉱石の観察と同定に関する講義を受けました。午後からの実習で

は、偏光顕微鏡についての詳しい説明と、実際に偏光顕微鏡を用いながらの解説があり、その後、初級と上級と2段階に分けて偏光顕微鏡を用いた実習を行いました。



鉱床パラタクソノミスト養成講座(中級)において
鉱石を解説する松枝講師と参加者

化石パラタクソノミスト養成講座（初級）

12月12日（土）に、当館准教授の小林快次氏を講師に迎え、総合博物館において開催されました。当初は6名の募集でしたが、応募者が多数に上ったため、10名の参加となりました。

午前中は、脊椎動物の骨格のつくりやその進化、古生物の研究法などに関する講義を受けた後、2つのグループに分かれ、バラバラになったワニの骨格標本を組み立てる実習を行いました。講義内容をヒントに各骨の形態や大きさに着目し、数十個もある骨を組み立てていきました。

午後からは、まず、骨を同定する際のポイントについての説明を受けながら、午前中に組み立てたワニ骨格の答え合わせを行いました。続いて、骨化石のスケッチ・計測実習を行い、それを終わると、3階のアイランドアークの展示

室に移動し自身のスケッチと計測データだけを頼りに、どの標本のどの部位の骨なのかを同定することに挑戦しました。



化石パラタクソノミスト養成講座(初級)において
解説する小林講師と参加者

(総合博物館)

第7回北海道大学教育GPセミナー「2000年後の美術館・博物館プロジェクト～現代アートとのコラボレーションによるミュージアムの活性化～」開催

総合博物館では、北大教育GPによる北大の教育システム改善のための議論や取り組み、活動が学内にとどまることなく、広く理解と協力が得られること、そして、日本の大学教育の質の向上に寄与することを目的に、平成21年1月より、教育GPセミナーを実施しています。

今回は、11月28日(土)に、美術作家で、福山市立女子短期大学・准教授の柴川敏之先生を講師にお招きし、「2000年後から見た現代社会」という壮大なテーマで取り組んできた“41世紀に発掘された携帯電話やパソコン等の化石”の制作などを紹介しながら、全国各地の美術館・博物館で美術品や出土品とコラボレーションし、魅力を引き出す展覧会や、市民・学生を巻き込んで行なったアートプロジェクトやワークショップなどの活動について講演していただきました。

まず、「2000年後の美術館・博物館プロジェクト」という取り組みを始めるきっかけについてお話しいただき、続いて、実物を実際に見せていただきながら、「2000年後に発掘されたらどうなるだろう」という発想のもとに制作された携帯電話やペットボトルの化石、などについて、化石の作り方やワークショップでの活動の

様子とともに紹介いただきました。

そして、広島県立歴史博物館での「2000年後の冒険ミュージアム」についてお話しいただきました。これは、県立歴史博物館全体を2000年後の博物館に見立てるといったコンセプトのもとで作られた展覧会であり、その後のすべての活動のベースとなるものでした。また、尾道での「尾道帆布」を利用し、学校、商店街や市民、学生、観光客を巻き込んだ参加体験型のプロジェクトや、青森県立美術館での「三内まるごとミュージアム」、千葉県佐倉市での美術館と町とが連携し、様々な商店に“化石”を展示したプロジェクト、などについても、今後の展望なども含めて、お話しいただきました。

参加者は、“化石”化した現代社会の品々に目を引きつけられ、美術館や博物館で展開される現代アートとの様々なコラボレーションについてのお話に熱心に耳を傾けており、講演後の質疑応答でも、ワークショップなどで効果的に用いられる帆布を用いた拓本について、41世紀に発掘されることを想像しながら作成されるさまざまな“化石”についてなど、熱心な質問が出されていました。



福山市立女子短期大学・准教授の柴川敏之先生による講演



(総合博物館)

北大教育GP主催公開研究会「フィンランドの『教えない教育』」開催

第2回公開研究会「フィンランドの『教えない教育』」が、第1回に引き続き、大学院理学院自然史科学専攻／高等教育機能開発総合センターの池田文人准教授を講師に迎え、「物語（ナラティブ）としての学び」と題して、11月21日（土）に総合博物館1階「知の交流」コーナーにおいて開催されました。

今回は、まず、前回の復習をかねて、スナフキンを主人公とした「春のしらべ」という短編の紹介と解説がなされ、スナフキンの作曲した歌の構造と物語の構造が平行になっており、この物語は、「他者との積極的な関わりを通じて確固たる自己を確立する」ことを伝えようとしている、ということ池田先生の解釈を交えながらお話しいただきました。そして、フィンランドの教育が、多様性の涵養により個を尊重すること、表現や行動の自由を認めること、他者との相互作用を推進することで、個の自立が目指されていることを復習しました。

次に、北大の前期試験の物理の問題とフィンランドの国語・算数・理科の教科書を例とし

て、前者は、本質に着目し、問題を細かくしてゆけば、複雑な問題も解決できること、すなわち、「科学技術のススメ」をメッセージとして発信しており、一方、後者は、すべてのものは構成化され（社会構成主義）、物語によって相対化されることをメッセージとして発信している、ということ説明していただきました。フィンランドの教育には、すべてに因果関係があり、流れがあり、起承転結（物語）があり、知識とは構造・修辞・比喩・対話を持った物語であることを教えていることを説明いただきながら、多様な環境に自らをおくことが重要であり、自分だけの物語（知識）を形成し、他人の物語（知識）を寛容することで、強い社会を実現することが、フィンランドの教育からのメッセージであることを講義していただきました。

池田先生からの話題提供の後、参加者からは、フィンランドの教育と日本の教育を比較しての意見や質問が多く寄せられたほか、現教職者や元教職者から現場の実情を交えた質問や意見も出され、活発な議論が展開されました。



池田先生による講演



（総合博物館）

北海道大学病院で「北大ポプラチェンバロとバロック音楽の調べ」を開催

北海道大学病院では、12月2日(水)に病院アメニティホールで、「北大ポプラチェンバロとバロック音楽の調べ」を開催しました。

ポプラチェンバロは、いつもは北大総合博物館(HoUM)にあります。多くの人達にその音色や歴史、楽器としての面白さなどに親しんでもらえるよう、様々なイベントが企画されています。今回の演奏会は、その活動を行っている北大総合博物館チェンバロアカデミーよりご提

案をいただき実現しました。

当日は、70名余りの患者さんやご家族の方々がチェンバロを囲むような形で座り、出演者のお話や演奏に間近で耳を傾けていました。フレスコバルディ、スカルラッティ、パーセルなどが演目となっており、演奏終了後はチェンバロに直に触れる時間もとられ、多くの人達(特に子ども達)が自分の手でチェンバロに触り、喜んで音を出して楽しんでいました。



チェンバロの伴奏で歌う久住千佳子さん



チェンバロの演奏

(北海道大学病院)

北海道大学病院でクリスマスコンサートを開催

北海道大学病院では、12月16日（水）、第42回ふれあいコンサート「クリスマスの夕べ」を開催しました。毎年恒例になっているこのコンサートですが、今年も会場のアメニティホールには、豆電球やぬいぐるみに彩られた高さ4.5mの大きなクリスマスツリーが飾られ、訪れた人々の目を奪っていました。

初めに浅香病院長の挨拶があり、続いて藤女子中学校・高等学校コーラス部23人による合唱が行われました。ゴスペルやおなじみのクリスマスソングが演目となっており、コーラス部の美しい歌声がアメニティホールに響き渡りました。

次に、4人組のハンドベル演奏グループ

「F4（エフフォー）」によるハンドベル演奏が行われました。ハンドベルの澄んだ音色により会場は穏やかな雰囲気になりました。

また、出演の合間には、サンタクロースに扮した職員から子ども達へのプレゼントが配られ、会場からは喜びの声が上がっていました。

最後に、北海道大学交響楽団の演奏があり、会場には美しい音楽が響き渡りました。

クリスマスムード一色のまま、コンサートは川畑看護部長の挨拶で幕を閉じました。職員らによる手作りのクリスマスコンサートは、訪れた人々の心に暖かな思い出を残したことでしよう。



開会の挨拶をする浅香病院長



藤女子中学校・高等学校コーラス部



北大交響楽団



閉会の挨拶をする川畑看護部長

(北海道大学病院)

北大幼児園最後のクリスマスお楽しみ会

教育学研究院附属子ども発達臨床研究センターの北大幼児園では去る12月13日(日)に最後の「クリスマスお楽しみ会」が開催されました。

始めに、12名の園児が、ハンドベルで「きらきらぼし」を演奏し、緊張の面持ちの幕開けでしたが、グラスを使った簡易楽器による演奏を、発達心理学実習などの授業で園児と接してきた学部学生と教職員が披露すると、園児たちは喜び感嘆し、にわかに本当の楽しみ会になりました。

続くプログラムは一人一人が得意なものを見せる「発表」で、園児はそれぞれ、なわとび、まりつき、鉄棒などを満面の得意顔で披露しました。

北大幼児園の最後のお楽しみ会ということもあって、沢山の小学生になった卒園児が参加してくれており、次のプログラムの準備ができるまでの間に、園児とじゃんけん・ゲームで更に雰囲気を盛り上げました。

続いて、北大交響楽団の有志の学生たちが、素人と思われないほどの腕前でクリスマスにちなんだ曲を弦楽四重奏で演奏してくれました。

そして、いよいよ園児のみんなで作り上げた「金のがちょう」の劇です。絵本の世界から始まり、自分達でセリフを考え、より良くなるように様々な工夫を重ねて一人一役で演じます。この子ども達の素晴らしい演技は、会場を夢中にし、大きな笑い声に包まれ、大いに盛り上がりました。みんなに楽しんでもらうことが出来て、大満足の幼児園の子ども達でした。

最後に、園児全員と会場の皆さんで「あわてんぼうのサンタクロース」を熱っぽく歌いました。その熱の冷めやらぬうちに、トナカイの鈴の音が聞こえてくると、サンタクロースが登場しました！！

大きな袋を持って現れたサンタさんは、恒例となった園児の沢山の質問にも答えてくれて、園児及び全て小学生以下の参加者に一人一人に素敵なプレゼントを手渡してくれました。

北大幼児園のこの最後のクリスマスお楽しみ

会も在園児のご家族の皆さん、学生・院生の皆さん、教職員、卒園児とその家族の参加を得て、あたたかい雰囲気の中、幕を閉じることが出来ました。



緊張の「ハンドベル」



園児による劇「金のがちょう」



楽しい「クリスマスお楽しみ会」

(教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター)

博士学位記授与

12月25日（金）に本学大学院研究科等の所定の課程を修了した課程博士は23人、及び本学に学位論文を提出しその審査、試験等に合格した論文博士は12人でした。なお、被授与者の氏名と論文題目等は次のとおりです。

（学務部教務課）

課程博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者		博士論文名
	氏名	氏名	
博士(文学)	今野毅	たけし	15世紀オスマン朝治下のアルバニア - 課税調査(タフリール)台帳の分析を中心に -
	熊坂亮	りょう	スイスドイツ語の諸相
	高橋知里	さと	日本・中国における信頼行動と返報行動：文化接合実験を通じた実証研究
博士(法学)	山根崇邦	くに	知的財産権の正当化根拠論の現代的意義
博士(医学)	真栄田裕行	ゆき	Ubiquitin-conjugating enzyme UBE2Q2 suppresses cell proliferation and is down-regulated in recurrent head and neck cancer (ユビキチン結合酵素 UBE2Q2 の細胞増殖抑制能および再発頭頸部癌における発現低下に関する研究)
	寺崎やす康	のぶ	An HLA-A3-binding prostate acid phosphatase-derived peptide can induce CTLs restricted to HLA-A2 and -A24 alleles (HLA-A3 結合 PAP 由来ペプチドの HLA-A2 および -A24 拘束性 CTLs への誘導能の研究)
	小西香苗	なえ	Prenatal exposure to PCDDs/PCDFs and dioxin-like PCBs in relation to birth weight (ヒト胎児期における PCB・ダイオキシン類曝露が出生時体重に及ぼす影響)
	小西慶二	じに	認知症ケアにおける医療福祉従事者と家族介護者の問題認識 - 家族介護者に対する訪問看護師の支援を通じて -
博士(工学)	のぶ延 かね啓 よし純	よし	Discovery of Majorana Fermions in Sr ₂ RuO ₄ superconductors (Sr ₂ RuO ₄ 超伝導体におけるマヨラナフェルミオンの発見)
	なか中 しか坂 ゆう佑 た太	た	多孔質材料細孔内の液相拡散機構とゼオライト膜による水の選択分離に関する研究
	つづ葛 やま山 たつ達 お夫	お	Development of the Air-flow Type of Mill Suitable for Fine Pulverization of Adhesive Materials (付着性原料の微粉碎に適した気流式粉碎機の開発)
	あか赤 しか坂 けい啓	けい	複雑形状周りの流れを短期間に解析するための直交格子法に関する研究

博士(工学)	アルバ カロリーナ Alba Carolina ブランコ チャパロ Blanco Chaparro	Land Readjustment in Socio-spatial Planning Application to foster Community Changes as a Poverty Mitigation Strategy. (貧困緩和に向けたコミュニティ改善を適用目的とした区画整理の社会・空間計画論的研究)
	はっ どり けん さく 服 部 健 作	塩分環境下における寒冷地道路橋コンクリートの耐凍害性に関する研究
博士(獣医学)	なが さき けん いち 長 崎 健 一	ハイドロキシアパタイトを担体としたエリスロポエチン徐放性製剤の開発
博士(情報科学)	よこ た ゆき え 横 田 幸 恵	制御された金属ナノ構造空間を用いた表面増強ラマン散乱に関する研究
博士(環境科学)	ひら いけ ゆ り 平 池 友 梨	A model study on descending surface water at the marginal ice zone relating to Antarctic Intermediate Water (南極中層水形成に係る氷縁域の表層水沈降を解明するモデル研究)
	い さ だ とも のり 伊佐田 智 規	PHOTOSYNTHETIC FEATURES AND PRIMARY PRODUCTIVITY OF PHYTOPLANKTON IN THE NORTHWESTERN SUBARCTIC PACIFIC (西部北太平洋亜寒帯域における植物プランクトン群集の光合成特性と基礎生産力に関する研究)
	まき ぐち ゆう や 牧 口 祐 也	Physiological biotelemetry study on migratory behavior in salmon (バイオテレメトリー手法を用いたサケ科魚類の行動生理学的研究)
博士(理学)	ユウ チウ ミン 郁 秋 明	Mechanism of Anomalous Strength in Double-Network Gels: Effect of Localized Damage Zone (Double-Network ゲルの高強度化メカニズム:ダメージゾーンの効果)
博士(農学)	し だ ゆういちろう 志 田 祐一郎	釧路湿原に成立する堤内ハンノキ林の動態に関する研究
	みや ひさ し 宮 久 史	北海道北部の針広混交林における択伐施業に対する下層木の応答に関する研究
博士(生命科学)	おお やぶ なお き 大 敷 巨 樹	Insight into the Epitope Structure of Anti MUC1/KL-6 Monoclonal Antibody (抗 MUC1/KL-6 モノクローナル抗体のエピトープ構造の解明)

博士学位記被授与

論文博士

博士の専攻分野の名称	博士の学位を授与された者	博士論文名
	氏名	
博士(文学)	三田誠司	萬葉集における羈旅と文芸
博士(教育学)	橋本好弘	消防隊員の勤務環境と心身負荷に関する研究
博士(医学)	早川峰司	持続的血液ろ過透析施行中の患者における抗菌薬クリアランスの算出と適正投与量の設定
博士(歯学)	ルパナポルンラープ LUPPANAPORNLRAP, スワニー Suwannee	Interleukin-1 β levels,pain intensity and tooth movement using two different magnitudes of continuous orthodontic forces (矯正力による疼痛および歯肉溝滲出液中 IL-1 β 量の経時的変化-適切な矯正力に関する検討-)
博士(工学)	太田直人	Preparation of Porous Carbons through Molecular Structure Control of Polyimides and Development of Their Functionalities (ポリイミドの構造制御による多孔質炭素の調製とその機能開発に関する研究)
	山崎真一	石狩川から流出する懸濁物質の石狩湾における栄養塩供給・移動特性及び土砂収支に関する研究
	坪川将丈	空港舗装の設計・維持管理手法の高度化に関する研究
博士(環境科学)	もり森 淳子	Periglacial Geomorphological Study in the Antarctic Peninsula Region - Recognition of Antarctic Peninsula Type Periglacial Environment and its Characteristic Solifluction - (南極半島地域における周氷河地形学的研究-南極半島型周氷河環境の認定とソリフラクション-)
	オランダ オマール Orlando-Omar プリエト マハニー Prieto-Mahaney	Studies on the Intrinsic Dependence of Photocatalytic Activities on Structural and Physical Properties of Titanium (IV) Oxide Photocatalysts (酸化チタン (IV) の構造・物性に対する光触媒活性の本質的な依存性の解明に関する研究)
	かわ河 原 哲 平	黄金色藻 <i>Ochromonas danica</i> から得られたクロロスルフォリピッド類の立体化学に関する研究
博士(理学)	くろ黒 田 茂	Iterated Function Systems in the Hippocampal CA1 (海馬 CA1 領域における反復縮小写像系について)
博士(農学)	いがら五十嵐 とし 俊 成	北海道米の澱粉分子構造に及ぼす登熟温度の影響と新食味評価法に関する研究

研 修

研修名(主催部局名)	開催期間	開催場所	研修目的
平成21年度国立大学法人 北海道大学事務職員英語研修 (総務部人事課)	平成21年10月26日 ～平成21年12月21日	北海道大学 百年記念会館 第二小会議室 他	国立大学法人北海道大学の国際交流 に関する職務,あるいはその他国際 的な施策に対応できる人材を育成す ることを目的とする

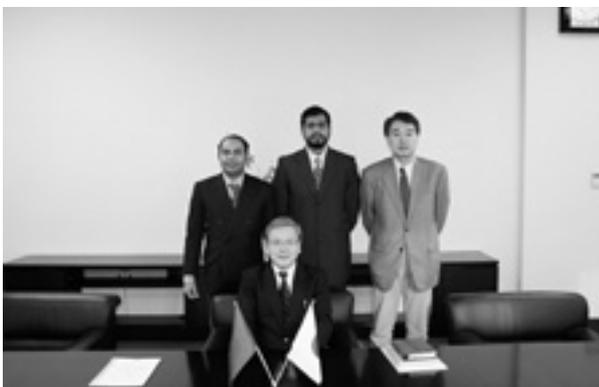


受講風景

表 敬 訪 問

〈海外〉

月 日	来 訪 者	目 的
21.12.15	サッポロ・デンタル・カレッジ(バングラデシュ) Zunaid Ahmed 准教授 ダッカ大学歯学部(ダッカ デンタル カレッジ, バングラデシュ) Haider Ali Khan 准教授	JICA 草の根技術協力事業に係る研 修のため
21.12.18	ブリティッシュ・カウンシル アリソン・ビール 駐日副代表	駐日副代表就任の挨拶
21.12.24	ザンビア大学サモラ・マシエル獣医学部 Aaron S. Mweene 学部長	両大学の連携に関する懇談



サッポロ・デンタル・カレッジ Zunaid Ahmed准教授(後列中央),ダッカ大学歯学部(ダッカ デンタル カレッジ) Haider Ali Khan准教授(後列左側)



ブリティッシュ・カウンシル
アリソン・ビール 駐日副代表 (右から2人目)

(学術国際部国際企画課)

諸会議の開催状況

役員会（平成21年12月7日）

議案・最先端研究開発支援プログラムの研究支援担当機関について

- ・大学国際化自己評価について
- ・教員の高齢者雇用安定法に基づく対応について

協議事項・先端生命科学研究院及び理学研究院の改組構想について

- ・全学運用教員の措置について
- ・重要な財産（土地）を譲渡する計画について

報告事項・就業規則関連規程の一部改正について

- ・会計検査院会計実地検査の実施について

教育研究評議会（平成21年12月16日）

議題・先端生命科学研究院及び理学研究院の改組構想について

- ・大学間交流協定の新規締結について

報告事項・教員の高齢者雇用安定法に基づく対応について

- ・寄附分野の設置について
- ・産学連携本部の東京支部について

役員会（平成21年12月21日）

議案・先端生命科学研究院及び理学研究院の改組構想について

協議事項・全学運用教員の措置について

- ・国立大学法人北海道大学人事委員会規程の一部を改正する規程について

報告事項・地域産学官共同研究拠点整備事業の採択について

- ・短期資金運用に係る取引金融機関について

規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

学内規程

北海道大学学生寮規程の一部を改正する規程

（平成21年12月7日海大達第184号）

本学の学生寮である北晨寮を改修することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。（平成22年1月1日施行）

国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス規程の一部を改正する規程

（平成21年12月11日海大達第185号）

国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス使用料等規程の一部を改正する規程

（平成21年12月11日海大達第186号）

平成21年12月11日付けで、本学函館キャンパスにインターナショナルハウスとしてゲストハウスおしよろを設置することに伴い、所要の改正を行うとともに、併せて規定の整備を行ったものです。

北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程

（平成22年1月1日海大達第1号）

平成22年1月1日付けで、薬学研究院に置く寄附分野を廃止すること及び保健科学研究院に寄附分野を設置することに伴い、所要の改正を行ったものです。

国立大学法人北海道大学水産学部等の施設に係る自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程

（平成22年1月1日海大達第2号）

本学の学生寮である北晨寮について、改修工事により受容電力の変更が行われることに伴い、所要の改正を行ったものです。

人 事

平成21年12月2日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	築 瀬 晴 子	大学院医学研究科助教

平成21年12月31日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【助教】 (辞職)	柏 崎 礼 生 上 田 泉 島 田 茂 樹	大学院情報科学研究科助教 大学院保健科学研究所助教 北海道大学病院助教
(転出) 大学入試センター	櫻 井 裕 仁	大学院情報科学研究科助教
【技術職員】 (辞職)	加 藤 浩 子 高 木 奈 緒 美 板 東 文 香 木 金 瑞 木	北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師

平成22年1月1日付発令

新 職 名 (発令事項)	氏 名	旧 職 名 (現職名)
【准教授】 大学院医学研究科准教授 大学院情報科学研究科准教授 大学院薬学研究所准教授	吉 永 恵 一 郎 伊 達 宏 昭 山 口 浩 明	採用 大学院情報科学研究科助教 採用
【助教】 大学院保健科学研究所助教 北海道大学病院助教 北海道大学病院助教 電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センター助教 電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センター助教 社会科学実験センター助教	下 田 智 子 武 田 真 光 柴 崎 跡 也 村 澤 尚 樹 松 尾 保 孝 品 田 瑞 穂	北海道大学病院看護部看護師 採用 採用 電子科学研究所助教 電子科学研究所助教 採用
【係長】 財務部主計課 (兼務)	伏 見 美 徳	企画部情報企画課係長
【主任】 総務部人事課付主任	北 野 修 司	メディア・観光学事務部係長
【嘱託職員】 工学系事務部教務課 (兼務)	藤 田 君 男	財務部調達課

訃 報

名誉教授 木村^{きむら}道也^{みちや} 氏(享年87歳)



名誉教授 木村道也氏は、病氣療養中のところ平成21年12月18日、満87歳でご逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

同氏は、大正11年1月8日鳥根県松江市に生まれ、昭和18年9月東京帝国大学医学部薬学科を卒業後、東京帝国大学大学院特別研究生、東京大学医学部薬学科研究生として研究に従事し、同26年4月千葉大学薬学部講師に就任されました。その後、昭和30年8月北海道大学医学部薬学科助教授、同31年4月同教授に昇任し薬品分析化学講座を担当、この間、同37年9月から1年間は英国に出張し、チェスター・ビティ研究所において在外研究に従事されました。昭和40年4月北海道大学薬学部創設に伴い同学部教授に就任、同60年3月停年により退職され、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。退職後は、鳥根県立鳥根女子短期大学長を務められ、地域高等教育の振興に尽力されました。

北海道大学在職中は、医学部薬学科の創設及び薬学部の創設に多大な貢献をするとともに、学部学生及び大学院学生の教育と研究指導に情熱を注ぎ多くの研究者等を養成し、大学等研究機関をはじめ各界に優秀な人材を送り出しました。この間、医学部附属病院薬剤部長を併任、医学部薬学科及び薬学部では評議員、学生部委員、薬学部長として大学運営の枢機に参画するとともに学部運営にも尽力されました。

同氏は研究面において、生体成分の分析化学、特に、ステロイドの化学分析における反応機構研究では、アニオン性シグマ錯体の分離やステロイドカルボカチオンの証明を行い、鈴蘭成分研究では、サポニン構造解析の方法論確立に先導的役割を果し、これらの研究成果に対し、昭和48年に日本分析化学会学会賞を受賞されました。

学会活動においては、日本薬学会北海道支部長、同理事、同評議員などを歴任、また、日本分析化学会においては、同北海道支部長、同常議員、同副会長を務められ、学会の運営に寄与

されました。また、同人は臨床化学の振興にも熱意を傾け、臨床分析化学談話会北海道支部を設立し、同会の支部長を長年務め、同会の全国組織として発展した日本臨床化学会の専門誌「臨床化学」の編集委員を務められました。さらに、薬剤師国家試験薬剤師試験委員及び札幌市公害対策審議会委員を歴任するなど、薬事行政や地域の保健衛生行政にも貢献されました。

以上のように同氏は、我国におけるステロイド化学分析の領域で数多くの業績を挙げ、学部、大学院において数多くの人材を養成し、我が国の学術の進歩と産業の発展に貢献されました。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(薬学研究院・薬学部)

名誉教授 おざわ やすとも 小澤 保知 氏(享年90歳)



名誉教授小澤保知氏は平成21年12月21日午前5時4分、老衰のため90歳で逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

小澤保知先生は、大正8年8月24日北海道

空知郡岩見沢町に生まれ、昭和17年9月北海道帝国大学工学部電気工学科を卒業し、陸軍兵器本部技術部、第9陸軍技術研究所、陸軍兵器学校を経て、同19年12月技術大尉に任ぜられました。その間、昭和18年6月御賜賞を下賜されています。終戦後、日本高周波株式会社を経て、昭和21年6月北海道帝国大学応用電気研究所研究員嘱託、同23年4月北海道大学応用電気研究所研究員、同23年8月医学部助教授に任ぜられ、併せて応用電気研究所兼務、同27年4月応用電気研究所に配置換、同33年10月同研究所教授に昇任、同34年4月工学部に配置換となり、同学部応用原子核物理学講座を担当されました。その後、北海道大学評議員、工学部長、大学院工学研究科長、工学部加速器研究施設及び直接発電実験施設等の長を歴任、この間京都大学教授を併任、昭和58年4月定年により退官し、同月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。北海道大学退官後直ちに学校法人北海道尚志学園北海道工業大学教授、昭和60年4月から同法人北海道自動車短期大学学長に就任され、平成10年3月に退職されるまでの間、研究・教育に留まらず大学運営全般にわたり尽力されました。

本学応用電気研究所において、不均質誘電体に印加する高周波電力の周波数選択加熱現象を理論的及び実験的に世界で初めて明らかにされ、医学における超短波治療や工業における高周波電力利用の基礎を初めて確立した研究としてネェチャ誌に高く評価され、自然科学系第1回英国文化振興会研究員として招請されています。この大電力高周波誘電体の選択加熱現象とその応用に関する研究に対して昭和28年6月工学博士の学位を授与されました。また、昭和36年には国際原子力機関(IAEA)主催の第一回プラズマ物理及び制御熱核融合研究ザルツブル

グ会議に日本代表団の一員として参加し、不均質プラズマの速度空間不安定性に関する研究により注目を集めました。

昭和29年原子力関係教育研究を進めるための北海道大学原子力委員会の中核的委員に選出され、我が国における原子力関係学科を五大学にとどめるとの設置計画の枠を北海道、名古屋の両大学に拡げるために尽力され、同42年4月北海道大学工学部原子工学科創設、初代学科主任教授に就任、学科開設委員として同学科の整備発展に貢献されました。また、昭和43年4月同学科エネルギー変換工学講座教授に就任後、電磁流体発電機(MHD発電機)の弱電離プラズマ流体の熱及び電磁両流体場の最適磁場配位の存在を理論的に明らかにし、所謂北海道大学型MHD発電機を提案し同55年8月国際特許が認められ、工学部に直接発電実験施設を設置、初代施設長に任ぜられました。対外的には電磁流体発電国際渉外委員会日本側代表委員、同国際渉外委員会副会長、昭和61年ユネスコ支援第9回電磁流体国際会議国際組織委員会会長等を歴任されています。

原子力の安全管理の分野においては、国の原子力特別委員会委員、原子力委員会専門委員、原子炉基準専門委員、原子力研究連絡委員会委員、原子力安全委員会原子炉安全専門審査会審査員及び同審査会副会長、通商産業省原子力発電技術顧問等を歴任し、放射線安全管理に貢献され、これらの永年にわたる原子力研究への貢献及び原子力安全への功勞に対し、昭和60年3月北海道科学技術賞ならびに同61年10月原子力長官賞(原子力安全功勞者賞)を授与されています。

学会活動としては、電気通信学会(現在の電子情報通信学会)北海道支部長、応用物理学会北海道支部長、同学会評議員及び同理事、日本原子力学会評議員企画委員長理事、同学会副会長、同理事及び同学会北海道支部長、電気学会北海道支部長を歴任すると共に、炉中性子物理、炉工学、パルス中性子利用、核融合研究、MHD発電機加速器工学の諸研究専門委員会委員長を歴任されました。

以上のように、先生は北海道大学及び他大学における教員歴は50年にわたり、この間北海道大学工学部長、評議員及び北海道尚志学園にお

ける学長，理事の要職を歴任され，教育研究及び大学行政の両面にわたって果たした功績は多大なものがあります。また，教育研究活動は極めて広い領域においていずれも国際的かつ独創的成果を挙げ，この間，国立他大学及び国の産業並びにエネルギー関係諸機関にいずれも十数年余の長きにわたり研究指導，助言及び安全管理審査等の面で尽力し，国の産業及びエネルギー行政に大きな貢献をしたもので，その功績は誠に顕著であり平成7年11月3日には勲二等瑞宝章が授与されました。

ここに謹んで先生の御冥福を心よりお祈り申し上げます。

(工学研究科・工学部)

北大グッズショップ・ニュース



—黒板消しストラップが2年半で販売数1万個を突破!—

北海道大学では、市民の皆様为本学をより身近に感じていただくために、認定商品やオリジナルグッズを販売し、大変好評をいただいています。

昨年末で、北大認定商品「ポプラの黒板消しストラップ」の販売数が1万個を超えました。

このストラップは、本学卒業生の三島千枝さん(チエモク株式会社)が平成16年の台風で倒れたポプラ並木のポプラ材で手作りしているものです。平成19年7月の発売当初から、店頭にも並べてもすぐに売り切れてしまうほどの人気商品で、その人気は今も続いています。当初は「緑の黒板消しストラップ」だけでしたが、現在は紺色、茶色、黄色などバリエーションを増やしてきました。

どの色も価格は1,200円(税込)、北大交流プラザ「エルムの森」内の「エルムの森ショップ」、総合博物館内の「ミュージアムショップ」及び北大生協でお求めいただけます。



販売場所

北大交流プラザエルムの森内「エルムの森ショップ」

TEL: 011-708-7540

営業時間/9:00~16:30(4月~11月は無休, 12月~3月は土日祝日閉店)

北大総合博物館内「ミュージアムショップ」

TEL: 011-709-3321

営業時間/9:30~16:30(月曜閉店, その他臨時閉店日あり)

※11月~5月は10:00~16:00

北大グッズショップ2店のホームページ: http://www.hokudai.ac.jp/goods_shop/index.html

【問い合わせ先】総務部広報課 TEL: 011-706-2606

E-mail kouhou@jimu.hokudai.ac.jp

〈編集メモ〉

▼2月上旬に『リテラポプリ39号』が発行されます。今号は主に高校生や高校の先生、保護者の方向けに、デザインや記事の構成を一新した特別号としてお届けします。記事には本学の研究者、学生だけでなく、『水曜どうでしょう』を制作した北海道テレビ放送の藤村忠寿氏、ポストペットの開発者である発明

系アーティストの八谷和彦氏など外部の方々にも登場いただきました。誌面に登場する人々の活動や発言から、特別号のキーコンセプトである「北大の現場感覚」を読み取っていただければ幸いです。特別号の発行は平成16年3月以来約6年ぶりです。高校生対象のガイダンスなどでぜひご活用ください。



2008.7.20 大雪山黒岳

——— 北の息吹㊦ ミネズオウ (*Loiseleuria procumbens*) ———

高山の稜線でマット状に広がる矮小化したツツジ科の一種であり、米粒サイズの葉よりは大きめの花を、上向きにびっしりと付ける木本植物である。本州の立山や蔵王の稜線でみられる花はピンク色がかった白色であり、沢山咲いていても目立つことはないが、北海道の個体は見事に紅いピンク色が多く、遠目に見ても容易に判別できる。本種の生える地理的範囲は極めて広く、周北極域から北半球全体の高山地帯まで分布するので、ヨーロッパアルプスのトレッキングでもおなじみの姿を見ることができる。

理事・副学長 岡田 尚武

北大時報① January 2010 No.670

平成22年 1月発行

北海道大学総務部広報課

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL : (011) 706-2610 / FAX : (011) 706-4870 / E-mail : kouhou@jimuhokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/